

385  
140

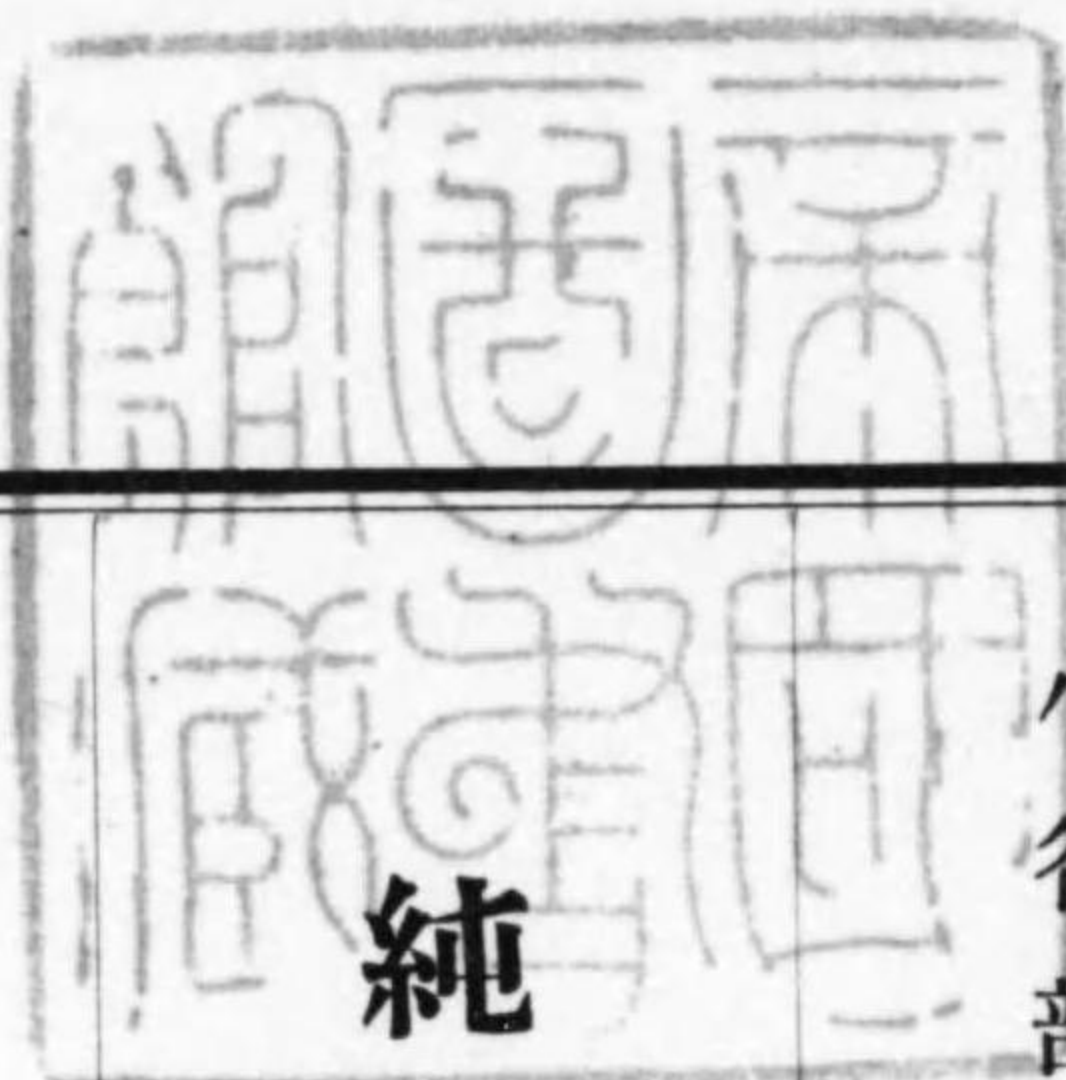


始





特 231  
627



小谷部全一郎述

純  
日本婦人の  
倂

東京  
厚生閣  
版







故小谷部菊代夫人の肖像

目次

一	執筆の要旨	一
二	生立と経歴	四
三	主婦となりて後の苦勞	七
四	滿洲に義經の墳墓發見	三六
五	晩年の平安	三七
六	終焉	三九
七	警世	四〇

以上



# 純日本婦人の佛

全一郎 述

## 一 執筆の要旨

人は何處より來りて何處に往くべきかと問ふ者あらば、母の胎内より出て、墓に入るべきものと答ふれば足る。然れば生を人間に稟けたるものゝ一度は必ず往くべき道に入ればとて、敢て驚くべきにあらね

ども、死を悲むは凡夫の常とするところ、況んや長の年月を影の形に添ふが如くに苦樂を俱にせる糟糠の妻に先達たるゝは、老ひて一人殘



れる者の不幸と寂しさは、例へば啞者の胸に言はんと欲して言ふ能はざるが如きものがある。私のこのたびの體驗よりすれば、片身をそがれたる鮒が、尙ほ且つ生を保つて、たよりなくも池の中に泳ぎ居るが如き、哀れはかなきものにてぞある。古歌に「ある時はありのすさびに憎くかりき亡くてぞ人の悲しかりける」とあるが如く、妻の生前には一身同體とて、彼我の間に何等の隔てなかりしより、或時は平素の愛の反動として憎しとも思ひしことありしが、みまかりて後は、愛憎の念も消え失せて唯だ悲みの涙のみ残るぞ愁しき。嗚呼二十四歳の春より六十四歳の春まで、全身全力を捧げて吾に事へたる貞烈無比なる吾が妻はいま何處にいましや。菊代々々と呼べど叫べど答へなく、残るは夢に見るありし世の懐しき佛のみ、覺めてはまた涙にかきくれて、

獨り活き残る吾身の不甲斐なさを悲むのみ。

私の若かりし頃は、志の遂行に熱中して家をも身をも顧みる暇なかりしが、多年千辛萬苦を嘗めたる賜にて、晩年聊か大悟徹底の域に達し、非力の者が自ら負ふ能はざる大石を獨り荷はんとするが如き無謀の志望を斷ち、求心歇む處即ち無事なれば閑かに筆硯に親しみ、子女等は皆獨立して前途光明に満たされたれば、之より高砂の尉婆の如く老夫婦相揃ひ、春は花に秋は紅葉に歌を詠みなどして、俱に人生の眞美を味ひ樂まんなど、茶飲話にせしことも今はあだとなり、廣き世界にわれ一人を残して、二度と歸らぬ永の旅途にのぼりたる吾が妻の、せめてもの供養の卒塔婆のつもりにて、忙中少閑を偷み此の書に筆を執れる也。



## 一 生立と經歷

本書に録する節女菊代は、明治八年一月十六日舊仙臺藩士石川氏の二女として仙臺市に生れ、家は市内屈指の資産家なりしより、蝶よ花よと乳母に傳かれ、何の不自由もなく愛育せられてありしが、小學校を卒業する頃に父は急病にて死せるより俄に不幸の身となりしは、榮枯盛衰の理とは云ひながら、未だ世の苦勞といふものを知らぬ少女の身には、傷心斷腸の極はみにてありしや知るべし。それは年若き兄が家を相續し、親が粒々辛苦して積みたる資産を濡れ手で粟の我物顔に掴み出し、慣れぬ海産事業に手を出せしより、一敗地に塗れて急轉直下、一家落魄して家族等は東西漠然たる異郷に流離するの悲運に陥ゆ

りたるなりき。

累代連綿として繁榮せる石川家没落後は、風蕭々として易水寒く、第一に其身の振方に窮し困厄の極に陥ゆりたるは、梅代菊代と呼ばれたる二人の年若き姉妹にてありしが、幸ひにも父の生前に、米國宣教師等が首唱となりて宮城女學校を創立するに際し、父は賣買の名義の下に、今の東三番丁の仙臺目抜きの土地を寄附せしより、其の謝恩の意味に於てのことなりしか、不幸なる石川家の乙女等二人を學校に引取り校費にて教育し、姉の梅代は押川方義牧師の媒介にて東京の松村介石氏に嫁し、妹の菊代も宮城女學校を卒業後、姉の縁先なる松村家に母と共に引取られてありしが、不肖の兄の心得違ひより祖先傳來の家を失ひ、異郷に呻吟せる老へたる母と若き娘の心情や如何に、思ひ



やるだに哀れなり。而も之は良き實物教訓にて、吾人の之に依つて學ぶべき事は、子孫の爲めに財産を遺すの無益なりと云ふことにて、之は恰も饑虎に羊兔を與へて啖はざらしめんとするが如く、却つて子孫を愚にし、獨立自尊の意氣を喪ひ、遂に祖先の祀を絶たしむるに至るべし。石川氏の生前に、土地を學校に寄附せる徳行が、圖らずも没後芽を出し、可憫なる二人の娘達に花を添へたるを思へば、人は生前に徳を積みて之を子孫に遺すは、慈愛の極致と謂ふべき也。

### 三 主婦となりて後の苦勞

當時私は在米十有三年の苦學生活を終りて歸朝し、父母親戚とてもなき身なれば、東京市内を漁りて下宿を求むれども、半世を物質文明の發達せる歐米に送りたる私の日には、孰れもアイヌ小舎の如くに映じて氣に入らず、漸くにして日比谷公園近くに、旭館といふ高等下宿を見出し、此處に止宿してありしが、或日以前米國エール大學に於て懇意にせる綱島佳吉牧師が私の寓居を訪問して言ふに、此の旭館は毎年議會の期節に、地方より上京する代議士の多くが泊まる宿にて、宿料も比較的高く不經濟なれば、寧ろ妻を嫁りて一家を成すに如かずと懇々忠告して止まざりしが、私は永くアメリカに在りて日本の事情に



通ぜず、また持參せる米貨を日本通貨に換算すれば倍額以上の金高となり、加ふるにアメリカの物價と比較して日本の物價は氣の毒なほど安く、一ヶ月五十圓の下宿料を拂ふも、紐育に於ては僅か一週間の宿料にも當らざれば、非常に安きものと思ひ、綱島は何を言ふかと相手にせず、妻を迎ふる事に就ても、私は幼少の時に母に死別し、父とも生別して、あらゆる世の辛酸を嘗め、青年時代に外國帆船に労働船客として便乘し、徒手空拳にて米國に上陸後も、苦學生として豫備校及び大學などを涉り歩き、學校卒業後は布哇傳道會社に就職してハワイに渡り、一軒の邸宅を構え、三ヶ年の自炊生活をせる經驗あれば、女のする事は何にてもやり、加ふるに祖先の血統の然らしむるものなるか生來非常な我儘者なれば、恐らく半月と辛棒の出来る女性はなかる

べしと考へたるより、綱島牧師の再三の勸告を斥けて容れざりしが、友情溢るゝが如き同氏は凝りもせず、妻帯を勸めて止まざるより一策を案じ、間接に斷はるつもりにて、到底出来ぬ相談を持掛けて曰く『有福なる士族の家に生れて高等教育を受け、年頃になりたる時に生家は没落し、家も無く所持品も無く、而も温順にして貞淑、守操堅固なる人あらば御推薦を乞ふ』云々と。之には流石の神學博士も啞然たりしが『良い心掛けてある』との一言を残して辭し去り私は斯く言ひし事をも忘れてありし一ヶ月餘の後に、綱島牧師は久々に來訪し『居つたよ居つたよ君が望み通りの娘が居つたよ』とて喜ぶより、其の何人なりやを尋ねたるに、舊仙臺藩士の女にて宮城女學校を卒業せるも、富有なりし生家は其後没落して家族離散の悲運に陥ゆり、いま東京の





私と代菊の日しりか若

一〇

姉の縁先の家に引取られて居る、姓は石川名は菊代といふ可憫の若き乙女なり云々と。是即ち不屈不撓四十年、氣儘者の私に事へて苦樂を共にせる菊代が定められたる運命にてありし也。

新婚早々の吾等は、殆ど無一物より新しき小家庭を作り私は東京に在住の米國宣教師グリーン氏の下に、横濱組合

基督教會の牧師となりてありしが、月給とは名のみにて米代にも足らず、妻の菊代は無報酬の女傳導師の如くに教會員の家庭を訪問し、髪などは無雜作に自分で結び、白粉などつけたることなく、日常貧苦と闘ひつゝありしが、私は兎に角、妻は若き身そらであるに拘らず、世間普通の女の身だしなみも出来ぬ心情を可哀想に思ふと共に、私も弱き人間の常として、時には不平も起りしと云ふは、グリーン氏も私も同じ米國の大學神科を出て按手禮を受けて牧師となりたる身なるに、一方は皮膚の色が白しと云ふことよりなるか、日本に來りて華族も及ばぬ生活を營み、麻布の高臺に堂々たる洋館を構え、二人の女中に料理人や車夫まで召使ひ、妻君は女傳導師として夫君と同じく高給を本國より受け居るに、黄色の皮膚の持主たる私は、陋屋住ひにて召使な

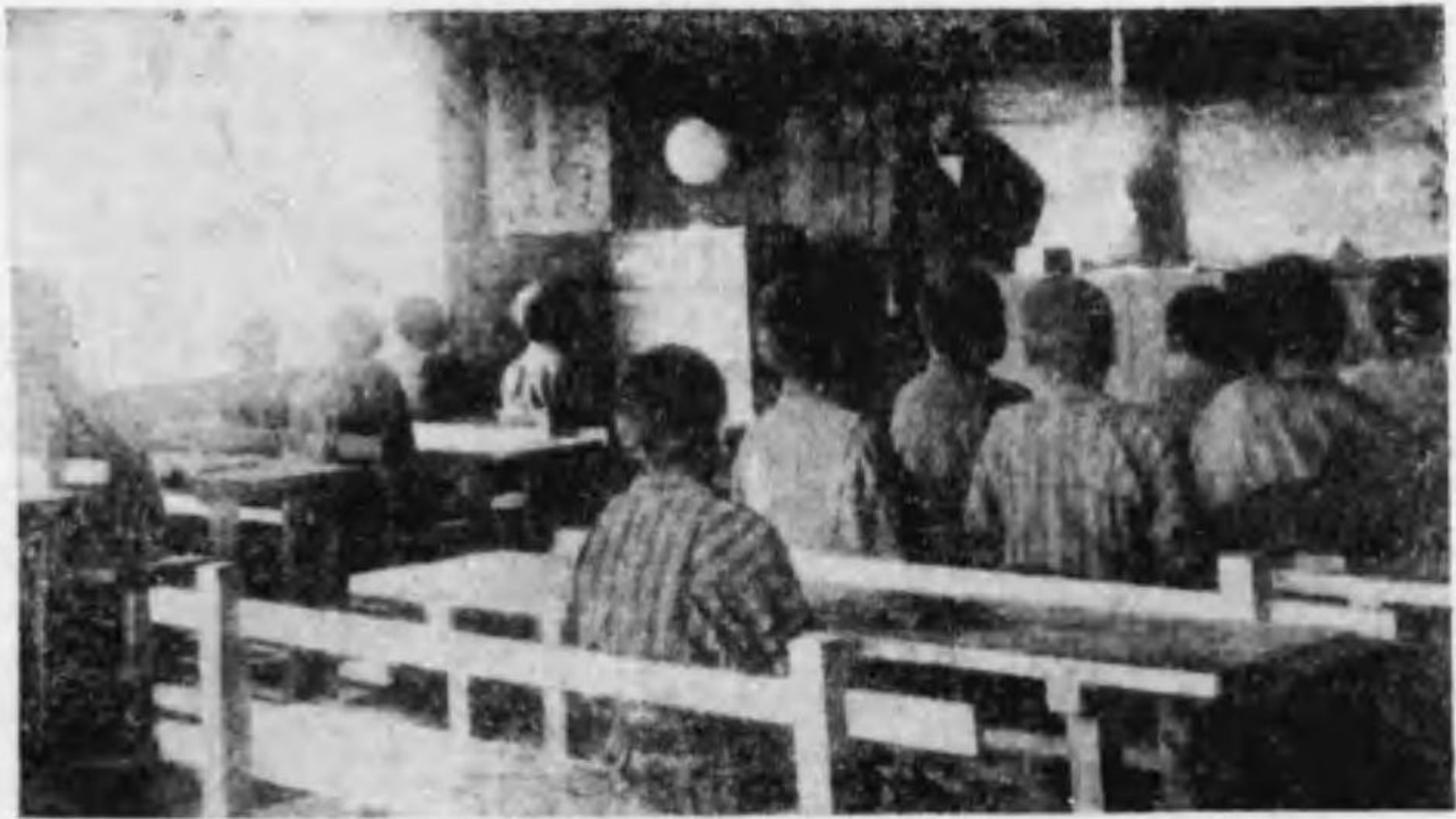


ど置く餘裕なく、常に清貧洗ふが如しといふ事にてありしが、之に對し若妻の菊代は一言も不平を洩さず、私に事へたる其の忍耐力と心事の高潔なるには、私は常に窃に泣かされてありしなり。

斯くして居る間に、端なくも私の一身上に心機轉換の一大事の起りたりと云ふは、或日曜の集會に私は教壇に起つて祈禱を捧げ神の道を説いて居る時に、靈感に打たれたる如くに私の心に浮び出でたるものは「吾は洋服を身に纏ひたる日本の神主の如き事を爲し居れば、寧ろ此の洋服を脱ぎ棄て、歴代の天皇が御遵奉遊ばさるゝ神道の神職となりて、濟世救民の天業に従事するに如かず」と。斯く思ひては矢も楯もたまらず、早速教會に辭表を提出して上京し、以前よりも一層苦しき清貧生活に甘んじ、神職の資格を得るに必要な國學の研究に従事

しつゝ、要路の人士を歴訪して、斯道發揚の急務を唱道してありしが、異教者なりとて容易に耳を藉す者なく、僅に宮内省掌典宮地嚴夫翁と日比谷大神宮管長藤岡好古翁及び靖國神社の賀茂宮司等が私に滿腔の同情を寄する位のものにて、他は多く毛嫌ひする狭量の輩なれば、時期尙早と諦め、救民の第一着手として、人の願るものなき無告可憫の北海道舊土人の救済教育の爲めに微力を捧げんと心に決し、近衛篤磨公を始め朝野の人士に説いて之が贊助を求めたるに、忽ちにして多くの同情者を得たるより、社團法人の會を組織して實行の基礎を固め、斯くして吾等兩人は北海道に赴き、アイヌ土人と内地人と雜居する膽振國虻田村に校地を選定し、我國最初の土人實業學校を創立し、三千年以來邦人の顧みざりし日本の先住民族を撫育せるは、今よりすれば





部落に創設せしるに於てアイヌ生徒に授けしつゝの私

一場の夢なるも、當時にありては眞劍そのものにて、生徒を募集するため全道のアイヌ部落を巡回するに、汽車賃なければ、吾家にて生れたる不馴の若駒に乗りて野宿旅行せしより、生れて初めて聞く海の荒ら波の音や、汽車の響きに愕き、棒立となりて乗りたる私を振り落し、九死に一生を得たること一再にして止まらず。私の額と頭部に疵跡あるは、其の當時の貴き記念なり。私は常に言ふ、凡そ他を救済する仕事の當事者は、其の事業

に依りて己れの生活をしてはならぬと。然れば虻田の部落に於ける吾等は自給生活にて、後園に果樹や桑などを植え、菊代はアイヌ女子等に裁縫や編物を教へる傍ら養蠶養鶏などして家計を助けたるなりき。人は此の苦しき生活の内情を知らず、私が高給を受けて居るに拘らず、美名を揚げて私利を營む者と誤解し、新聞に誹謗の記事を掲げられたることもありしが、併し天識る地知るにて、北海道の名士佐藤昌介博士及び伊達男爵等を始め、具眼の士は『小谷部が有爲の身にて部落に入り苦勞をするは自分の志の爲めなれば其れで満足なるべきも、良人の志の犠牲となつて語る友もなきむさぐるしきアイヌ部落に住む若い夫人にお氣の毒でならぬ』云々とは私が人傳へに屢々耳にせることなりき。而も菊代は一言も不平を洩らさず、終始一貫十年一日の如く私





部落に於けるアイヌ學校訪問の二條基弘公  
前列つて左二條公・其後私

に事へたる其の忍耐力と心事の高潔なるには、私は常に窃に泣かされてありし也。

吾等が十ヶ年の部落生活中に、最も感激に堪えぬ出来事は、時の貴族院議長近衛篤磨公が、随員小原男爵と俱に部落に於ける私の茅屋を訪はせたまひ、見苦しき私の草廬に御宿泊の光榮を給はりたる事と、畏くも明治天皇陛下には、北條侍従を北海道視察に御差遣したまひたる節、同

侍従閣下は私の茅屋に御立寄りになり、アイヌ教育に關する事と土人風俗の一般を録して献上せられ度し、乙夜の覽に供し奉る可しと申さるゝに依り、其の如くせし事と、公爵二條基弘公が随員と俱に私の草廬を訪はせたまひ、一汁一菜の食卓を共にして歡談の光榮を給ひたる事などにてありき。

是より先、私が北海道に赴く前に、若し得らるゝことならば内務省の補助を得んと欲し、時の内務大臣床次氏に面會して陳情せしに、大臣は私を時の勅任事務官白仁某に紹介し、萬事談合せよとのことなりし故、其の如くせしに、事務官曰く『政府は損して益なき事を補助する譯に參らぬが、併し君が先づ範を示して土人部落に移住し、成績を擧げて見せたなら、或は多少の補助をするかも知れぬが、先決問題は



君の努力如何にある』云々と、極めて蟲のよき言ひ條にて、苟くも身分あり最高學位を有する者が、身を降して遠く北海道に移住し、舊土人の教育に當らんとするに對し何の同情をも表せず、恰も路傍の乞食に對するが如き態度に、私は愛想をつかして歸れるなり。俗吏は公務を以て、小商人が利を市井に争ふが如き觀念を有するは誤れり、自己を損して他を益するは仁政の極致にして、之が結極己れを益するものなるを知らざるべからず。於是乎、官に縋るの無益なるを覺り、民間の有志に訴へて助力を求めたるに、同情者は四方に起り、特に鍋島直大侯及び岩崎久彌男其他徳川達孝伯などは、個人としての私を後援せられたれば、吾等夫婦は旅装を整へて北海道に出發せるなりき。當時未だ奥羽鐵道の布設なかりしより、旅客は横濱より日本郵船會社の定

期船に便乗するを常とせり。吾等も函館行き定期船に乗りて横濱を解纜せしに、金華山沖に差しかゝりたる頃、風波少しく強く、菊代が船に酔ひしを見たる船長は私に告げて曰く『定期船はこれ位の風波にて途中碇泊するなどは規則上許されざる事なるも、貴殿御夫婦の壯途に御同情申上げ、電報にて本社の許可を得、今晚は萩の濱に碇泊し、風波の鎮まるを待つて明朝出帆致すべし』云々と。船長は郵船會社の古參者にて名を酒井氏と云ひ、私は今も當時を追想する毎に、其の厚意を感謝し居れり。私に對する世人の同情は概して此の如きものにて、昭和年代の若き人々には、想像にだも及ばぬことなるべし。

光陰の過ぎ去るは矢よりも早く、吾等が虹田の部落に移住し、教育事業を開始してより早くも十年の歳月を閲し、其間種々なる逸話珍談



あるも、本書の出版を急ぎて時間なければ略して記さず。斯くて成績の見るべきものありしより、政府は我會の幹部の一員なる代議士加藤政之助氏の斡旋に依りて制定せられたる、北海道舊土人保護法に依り全道の主なる部落に土人學校を設立する事となりたれば、之が主唱者たる私が北海道に居りては、小舅の如くにて新進官僚諸氏の邪魔ならんと考へたると其他の事情等に依り、多年經營せる虻田の學校を北海道廳の直營に委ね、十年住み馴れたる吾等の家を故高橋是清翁の子息に譲り、多年に亘りて發掘採集せる石器時代の石器土器一千餘點を携へて歸京せるは、之も今よりすれば一場の夢にてありし也。

東京に歸りて後ち間もなく、更にまた可憫なる菊代を私の志の犠牲にして、辛苦艱難を重ねしむるの餘義なきに至りたるは、内心氣の毒

にてもありしが、天賦の志は匹夫も奪ふべからざることにて、私の宿望は天の命じたまふところと信じたるより、家事を妻に委ねて、理想の實現に奔走せるなりき。其れは國家の保護を受くるより、自ら怠慢



艱難時代の菊代

に流れ、徒らに古風古習に拘泥して進取改良の志氣なく、常に眠れるが如き我國の神道家に活を與へ、世道民心に裨益するところあらしめんとせる私の宿志の遂行にて、青年時代より常に

着て居る洋服姿にては、日本主義にて固まり居る國學者及神職達に、以前の如く毛嫌ひして敬遠されてはならぬと思ひ、着慣れぬ羽織袴に



禮装を整ひ、何人の補助も後援もなく、自發的に奮起して東奔西走し、常に席の暖まる暇なく、同志の一人なる當時の内務省宗教局長斯波淳六郎氏など、は、日曜日の朝より眞夜中頃まで議論に夢中となり、時間も忘れて歸りは翌朝の一時頃となり、電車はあらず餘義なく四谷鹽町の同氏の邸宅より、大井元芝の吾家まで二里餘の夜道を徒歩にて歸るを常とせり。終日辨當持參にて奔走し、一錢の利をも家に齎らさぬ私に對し、菊代は一言も不平を洩さず、終始一貫、私に事へたる其の忍耐力と心事の高潔なるには、私は常に竊に泣かされてありし也。

斯くて雨の日も風の日も、倦怠なく奔走すること二ヶ年餘の後に至り、私の精神は漸くにして時の内務大臣に認められ、神職養成の機關にしてその本元なる、皇典講究所及び國學院大學の講師に推薦せられ

て就任し、當時の學長は杉浦重剛先生にて、一見十年の舊知の如く、肝膽相照し、互に胸襟を開いて語り、皇道振興の爲めに聊か微力を致すことを得たるなり。斯くて機運も少しく熟したるより、私は神道興隆の一會を組織せんと欲し、斯道の有力者等を國學院大學の講堂に招致して協議會を開きしが、是より先、此の會合に私の信賴する友人が居りて、私の主張を支持するあらざれば意見が採用されぬと見たるより、エール大學の同窓にて豫て別懇にする子爵福岡秀猪氏に事情を話し、此の會に出席して私の主張を支持せられたしと懇請せしに、子爵は心よく之を承諾せられ、當日の會議に出席せられしが、驚きたるは神職及び國學者諸氏にて、彼等は代表の長老に言はしめて曰く『此の席に耶蘇教信者である福岡子爵の居らるゝは意外なり、速かに御退席を乞



ふ」云々とて大問題となり、議場は囂々として蜂の巢を突けるが如くなりしより、私は子爵に對して面目を失ひ、止むを得ず退席を願ふと共に、私も責任を負ひて退場し、併せて學校をも辭したるより、主唱者なき會は成立すべくもなく、其のまゝ流會して斯道興隆の機運を失ひ、以て今日に至りしは、國家百年の長計の爲め深憂に堪えざるところ也。

當時我國は歐米諸國と共同して西比利亞出兵の事に忙しく、私は一時神道界より氣を抜く爲めと、豫て研究中なりし義經公入蒙の實地調査の希望もありしたため、陸軍の文官試験を受けて之に通過し、奏任待遇の陸軍通譯官に採用され、最先鋒の露國チタ市に設けられある、日本軍司令部附を命ぜられて赴任せしが、露國過激派軍討伐の爲めなれ



(右て向) 私の中見探跡遺の公經義て於に古蒙

ば、必死を覺悟して鹿島立つたる跡の吾家を、獨り守りて複雑なる家務や子女の養育に任じたるは吾妻菊代にて、感激に堪えざると共に、その勞を慰めんとするも今は其の人亡く、空しく既往を追懷して暗涙に咽ぶのみ。

西比利亞より歸朝して後、休まんとせしが容易に辭職を許されず、高等官待遇の陸軍文官として陸軍省に勤務し、後に本省より陸軍大學校教授に補任の恩命あり、斯くなるまでには、陸軍最高幹部の



協議を重ねたる事なるべければ、之を辭するは内心恐縮にてありしが、私には國史の誤謬を正して、不遇の義經公を世に顯正し、公は世界三大英傑の一人なる、成吉思汗となれりと云ふ大問題を胸中に藏したれば、遺憾ながら名譽ある大學教授の恩命を拜辭して野に下り、清貧生活に入りて再び吾妻に不自由と苦勞を重ねしむるに至りしは、氣の毒にてもあり可哀想にてもありしが、『之れもお志の爲めなれば致し方なし』とて菊代は一言も不平を洩さず、而も私の心の裡は感謝と泣きの涙にてありし也。

斯くて後ち私は書齋に引籠り、先に滿洲蒙古に於て實地踏査せる日誌や記録に基き、『成吉思汗は源義經也』と題する原稿を完成して之を刊行せしに、圖らずも大方の歡迎を受け、數版を重ねるの盛況に至り

しと共に畏くも 天覽の光榮に浴し、明治神宮を始め伊勢大廟にも奉納せしが、發行後幾ばくもなくして、十有七名の博士及び所謂史家等が一團となりたゞ一人の私の所説を反駁し『成吉思汗は源義經にあらざ』と題する本を、神田の雄山閣より發行せしより、多くの私の友人等は默殺せよと忠告せしが、既に 天覽を賜りたる公刊書なれば、之に對し、卑怯がましく手を束ねて沈黙を守るに忍びず、寢食を廢して『著述の動機と再論』と題する反駁の反駁書を刊行し、彼等に一撃を加ふると共に、時の内大臣牧野伸顯伯の斡旋に依り、此書もまた 天覽の光榮に浴し、爾來反對論者等は屏息憎伏して一言をも出し得ざるより觀れば、勝利は私に歸したるものにて、當時必死となりて執筆や講演に従事し、一切家事を顧みざりし私に内顧の憂を與へざりしは、偏



に吾妻菊代の隠れたる内助の力にて、而も之に對し一言も不平を洩さず、全身を捧げて私に事へたる其の忍耐力と心事の高潔なるには、私は常に窃に泣かされてありし也。

妻の菊代が掾の下の石となりて私を内助せる『成吉思汗は源義經也』の發行後十數年を経たる今日と雖も、本の名聲は嘖々として人口に膾炙し、今年一月菊代が永眠せしより四日目の而も偶然にも菊代の誕生日なる一月十六日發行の東京報知新聞に、成吉思汗は義經かといふ大見出しの下に、左の如く載せて世の注目を惹けるが如きは其の一例として觀るべく、茲に同紙の記事を轉載して參考に資す。

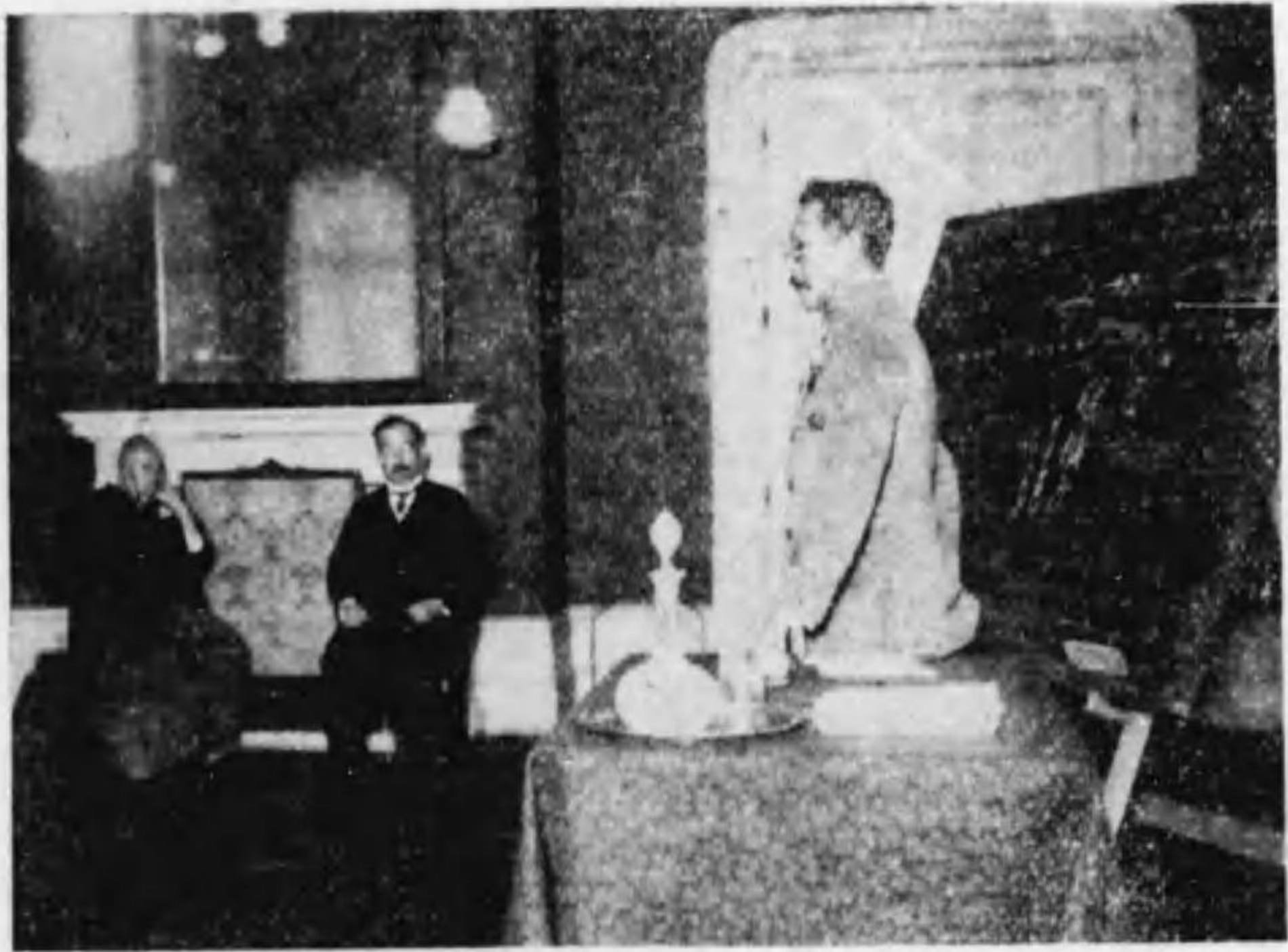
## 成吉思汗は義經か

### 學界論争の跡

震災の翌年といへば大正十三年秋も深い十一月の半ば、華族會館の講堂では清和源氏の流れを汲む徳川一門の達孝伯爵を初めお歴々が集まつて一代の快演説に酔うてゐた。

『徳川一門には祖先に當る源氏の義經公は、衣川の館で兄爲頼の奸計にあへない最期を遂げたとは眞つ赤な嘘、實は死んだと見せかけて、北海道に落延びたのである。義經はそれから樺太からシベリアを経て蒙古に入つた。歐亞の天地を征服した世界の三大英雄の一人成吉思汗が即ち秘められた義經その人なのである。多くの歴史家が英雄義經を衣川で死なしてしまつてゐるのに憤慨して自分は奥羽の果からシベリアの奥までくまなく調査してこゝに「成





東京華族會館に於て義經講演中私の  
中央當時の待從長徳川達孝伯

「吉思汗義經也」を完成した」

語つた人は永く北海道でアイヌの教育に當り後陸軍の通譯官となつて北滿、シベリアに生死の巷を往來したドクトル・オヴ・フエロソフエー小谷部全一郎氏である。並居る華族方もすつかりその所論に感激させられた。その後援もあり、小谷部氏は一代の倫理學者杉浦重剛先生の支援で『成吉思汗義經也』を出し、舌鋒鋭く史學界のお歴々の舊説

を覆した。

大正十四年の歴史學界はかなへをひつくり返したやうな大騒ぎ。『成吉思汗は義經ではない』といふ立前をとる學者は總動員、今度學士院にをさまつた東大の池内博士を初め死んだ箭内博士の外に大森、金田一、沼田、鳥居といつた今の史學界の重鎮が總出で、一人の小谷部氏の學説を叩き伏せた。しかし公平に見て學界のお偉い方の反對説も實は文書の隅をほじくつての立論とおまけに感情六分の攻め方で謎をといてあますなしとはいへない。由來義經の末路を惜しむ成吉思汗論は徳川時代から根強くとなへられてゐる。それが明治の初年重野安繹博士が謬論であると定説し、そのあと小谷部全一郎氏が反對論を大成したのである。

たゞ義經を思ひ成吉思汗をしのぶ蒙古にはその時以來の獨立の旗がひるがへつてゐる。この際兩者の説を解明して、誰が歐亞の天地に實地檢證する篤



學の人の解決を待つこととしよう。

成吉思汗は義經だど固く信ずる小谷部氏の所説はかうだ。成吉思汗を義經でないといふのは明治の學者が吾妻鏡とか、玉葉とか尊卑分脈とかを重んじたからである。試みに水戸光圀の大日本史には『頼朝が死んだ義經の首實檢をしたのは四十三日もたつてからである。いかに焼酎漬にしてあつたとはいへ眞夏のこと、首は人相を分別出来ないまでたゞれてゐた。多分義經は逃げたのだらう』といつてゐる。その通り實は藤原の秀衡は死ぬ時その子の泰衡と義經を呼んで、錦に包んだ書置を一巻づゝ渡した。その中には萬一の場合、なれ合つて『居館に火をつけ自刃を装つて蝦夷にのがれよ』と書き地圖までそへてあつたといふ。泰衡も頼朝の手前もあるし兩方の顔を立て、義經が逃げたのを見計らつて兵をさしむけ、かつ義經に酷似した杉目行信といふ者の首を代りに差出したのである。

死を装つて逃げた義經は間道を通つて今の岩手縣宮古港に出で、それから船で八戸に至つた。そこで妻女の川越氏は産後の肥立ちが悪くて死んだ。考へた彼は思ひ切つて蝦夷に渡つた。そこで獵獸漁業を土人に教へたりしてゐたが、更に樺太に渡り一衣帶水の間宮海峽を越えてニコライエフスクに渡り、黒龍江をさかのぼり、ウラジオの東南なる蘇城に上陸した。後興安省に本據をおき、つひに廣古の西進を試みたのである。

義經が一代の光榮たる即位の時、源氏の白旗九流をオノン河畔にひるがへしたといふことまで一々地方々々の傳説や古文書を綴つて説明してゐる。成吉思汗も四十までの傳説は不詳である。しかも蒙古族の後裔である清朝の明君乾隆帝は、古今圖書集成一萬卷の序文に自ら『朕か姓は源、源義經の裔也。その先は清和に出づ故に國を清と號す』と裏書してゐる。ロシアのイワニン博士の『鐵木真用兵論』には成吉思汗の風貌を『やせ身で背が低い』と書い



てゐる。日本の古文書にも『九郎は背の小さき男、色白なるが、むか齒の少しさし出云々』とある。義経程の英雄が未だ實戦に一度も経験ない泰衡ごときの寝返りに自刃する筈はない。義経が成吉思汗であると断定してこの兩英雄の前後兩半世のなどを解いてゐる……これが小谷部氏の立論の要領である。

これに反對の所説は、遠く明治初年重野博士が、前記吾妻鏡等の文書を基礎に『成吉思汗をもつて源義経とするのは「抱腹絶倒無稽も甚だしい」彼はまさしく衣川の館で先づその娘を殺し、更に妻を殺し、最後に自分を殺して一代の幕を閉じてゐる』と結論してゐる。その後黑板博士も史學者的立場からこの説を立て歴史の正論とされてゐる。

ところが當時小谷部氏の議論は何しろ我が上流階級のお歴々の支持もあり同氏が親しくその遺跡を訪ねてゐるので反對にも汗だけであつた。先づ一線



に刃向つた大森金五郎學士は著者は傳説を重んじかつ史書の識別がない。成吉思汗の前半世はチャンと那珂通世博士の研究によつて審かにされてゐると應酬した。

更に矢面に立つた箭内博士は小谷部氏のよつた外國の書物を引用『成吉思汗はニロン族テムジンと稱し、父をエゾカイと云ひ、青年時代、鍛冶屋でニロンの鑛夫の味方で天下を統一したとあるのはニロン族は日本のなまり、テムジンは天神、エゾ海は義経が渡つたエゾの海、鍛冶屋は義経青年時代の金賣吉次のこと、鑛夫とは昔日本からシベリアに行つてゐた出稼人のことである』といふのを言語學の方面から見てそんななまりはないと反駁した。源義経IIゲン、ギ、ケイ、といふ發音を蒙古人はケヤオンと呼ぶ。これは支那の奇屋溫氏（成吉思汗の事）と同音で符合するといふ點などに至つて緻密に小谷部氏が辯證してゐる。



最も猛烈なのは中島利一郎氏で『小谷部氏の所説は末松謙澄子爵がロンドンで出版した英文成吉思汗論（明治十二年）の盗用である』と稱し口きたなく人格的方面にまで及んで攻撃した。冷靜な學者の所説がかくまで興奮せねばならなかつた點、いかにこの渦紋が多きかつたかを物語るものである。

昭和十三年一月十六日發行東京報知新聞所載

私は報知新聞を購讀して居らざれば、右の如き記事あることなどは少しも知らずしてありしが、私の本の讀者の一人にて東京九段四丁目に住する志賀正路氏を始め、北海道積丹郡餘別の伊藤二郎氏外十數氏、或は遠く北滿洲新京北安路に居住する渡邊定次氏と云ふ人などより、前掲の記事ある同一の東京報知新聞を私に寄贈せられたるに依り始めて其事ありしを知ると共に、多くの歳月を経たる今日に至るも猶ほ忘

れずに私を支持する讀者諸彦の厚意と熱誠に對し、衷心より感謝の意を表する也。例へ社會の耳目とは云ひながら、前掲の報知新聞の記事は正確と詳細を極めたるものにて、正に有聲の畫、無訥の詩の如き感あり、之亦感謝に堪えず。反對論者等が表面に現はれたる史記を嚙呑みにして、紙背に潜む實際の條理を究めざるが故に大傷を招き、井蛙の見を以て海洋を論ずるが故に識者の嗤笑を招ぐ、慎まざればあるべからず矣。



#### 四 滿洲に義經の墳墓發見

本書には前述の如く私自身に關する記事多ければ、讀者或は之を以て私の自序傳の如しと非難すべけんも、隠れて外に現はれざる妻の辛苦と内助の功を顯彰するには、勢ひ表面に立つて活躍せる私の生涯を敘述せざれば顯はれぬこと故止むを得ざる次第なり。其一例として小著『成吉思汗は源義經也』に執筆中などは、私の雜に書きたる草稿を更に原稿用紙に精書せるは吾妻菊代にて、私が徹夜して仕事に従事すれば、本人も同じく徹宵して校正刷の修正などに従事し、又私が終日外に出て東奔西走して家に在らざる時は、妻が留主を守りて家務に當り、子女等を養育する傍ら訪客に接するなどにて、外にある私と同じ

く内にありて多忙を極むるものなるに、人は私一人の存在のみを見て、隠れたる功勞者なる妻を思はざるが

如きは即ち是れなり。また彼の赤穂四十七義士を觀るに、孰れも名聲赫々旭日の東天に昇りて八表を照すが如くなるに反し、其等の人々の妻室に至りては杳として世に聞こゆるところなく、東京芝の泉岳寺に於ける義士の領袖大石良雄の墳墓には年中毎日香煙の曾つて絶へることなきに、其の妻室の墓の如きは人の之を顧みるなく、その所在をすら知る者なかり



像木の身等公經義と址城館高奥陸  
りな體神御の社神經義館高は像木



しに、先年池上本門寺にて墓地整理の際、無縁塚の草莽中に之を發見し、今は修理せられて墓側に大石良雄の妻の墓と記したる立札を建てあるも、其の墓に香花の供へられあるを曾つて私が見たることなし。大石良雄の傳記は史書に稗史に劇に講談に傳へられ、萬代不滅の聲望は隆々として迅雷の如きものあるその裏面に、彼の半身たる妻女の苦節なくして可ならんや。若し良雄をしてその生前に妻に先立たれ、彼が其の妻の隠れたる苦辛及び功勞を顯正せんとして傳記を書くものとせば、良雄自身の生立より妻の死亡當時までの困厄究苦沐雨櫛風の状況を記述せしや知るべし。是れ即ち私が自傳の一端を叙述して、内助者たる妻の苦心を顯正するに助めたる所以也。

義經の入夷に關しては、明治の初年末松謙澄氏が、英國ケンブリッ

ヂ大學に在學中、ロンドン圖書館に於て、日本歴史の研究家蘭入シイポルト博士の著書中に、義經日本を逃れて大陸渡航の學說あるを閲し、之を參酌して卒業論文を書きたるものが日本に傳はり、當時慶應義塾の學生にてありし内田彌八と云ふ人が右の論文を和譯し、之に『義經再興記』と命名して東京日本橋本石町上田屋書店より發行せる小冊子一部あるのみなれば、日本全國は勿論滿洲蒙古及び西比利亞の各地まで遍歴して、義經の遺跡を實地探究し之を世に發表せる者は、古住今來不肖小谷部全一郎一人のみなりと言ふも過言にあらざる可し。當時其筋より名譽ある陸軍大學校教授に推薦せられたるをも拜辭し、此の研究に従事せる私の熱誠に對し、同情者は翕然として續々現はれ、此の小著に對し、全國の諸者諸彦より寄せられたる禮狀は行李に充満し



て保存されあり、更に初版發行以來十數年後の今日に至るも各地の愛讀者より感謝狀及其地の物産などを贈らるゝあり、最近南滿洲大連市信濃町に住する未知未見の人にて林淳一郎と云ふ讀者より、禮狀に添へて義經の墳墓滿洲に於て發見せらると云ふ記事を掲載せる滿洲日日新聞を昨年十二月以來數回に亘りて寄贈せられ、更に今年三月八日同九日發行の滿洲日日新聞に、またも義經の墳墓に關する記事を載せたるものを贈られたれば、其等の中の一部を茲に轉載し、讀者の高覽に供すると共に、曾つて私に對し螻蛄の斧を振りたる反對論者等の頂門の一針たらしめんと欲す。

## 公主嶺の附近に源義經の墓

### 縣公署が實否を調査

北海道を始めシベリア方面に残されてゐる源義經を繞る古蹟や傳説を基礎にして「不世出の英雄ジンギスカンは源義經なり」との新説が小谷部全一郎氏に依つて提起され一頃史學界はもとより一般に多大の興味を投げかけたことがあつたが、今回圖らずも懷徳縣公主嶺附近に「源義經の墓」がある、との極めてセンセイショナルな話題が提供され各方面を驚かせてゐる。

公主嶺附近が往時蒙古文化と滿洲文化の極めて濃密な交流地點であつたことから、そして前記の「ジンギスカンは源義經なり」との説を一應肯定して考へるとき「義經の墓」の存在説を虚構の風説として沫殺する譯にゆかないのであるが、いづれにしても「源義經の墓」を繞る説は地元民は勿論一般に



非常な關心の對象とされるに至つた。殊に地元の懷徳縣公署では右の説を聞  
込むと同時に佐々木副縣長を初め菅副參事官、野崎屬官等が「事實とすれば  
國寶物だ」とばかりに意氣込んで早くも縣公署禮教科を總動員、一齊に附近  
古蹟の調査を進めることになつた。

### 金文字刻む石碑

#### 農家の垣の中に在る

右の源義經の墓といふのは石碑に金文字で源義經の墓と麗々と刻んだ石碑  
で、公主嶺附近の農家の垣の中に在るといふのであるが若しこれが事實とす  
れば前記の如く「ジングスカンは源義經なり」との説に非常に有力な資料を  
提供するばかりでなく、岩手縣の衣川で戦死したことになつてゐる日本歴史  
の一角が修正されなければならなくなる譯で問題は頗る大きいのだが、數年

前から右の説を聴き終始興味を持ち續けて來た前公主嶺農學校中本校長は語  
る。

實はこちらに着任早々この附近に源義經の墓があるとの話を聞き込み非常  
に興味を持つた譯でしたが、つい最近もたびたびそのやうな話を聞いてゐ  
ますが、たゞ附近の農家の垣の内にあるといふだけで今日になるまで突止  
めることが出来ませんでした。

### 積極的に古蹟を調査

#### 菅、野崎兩氏談

又懷徳縣公署の菅野崎氏は交々語る。

その話を聞いて驚いてゐますが「何しろジングスカンは義經なり」との説  
もかなり根據のあるものらしいので、さすれば當地は往時蒙古との交易も



頻繁でありましたし、何かとさうした貴重な古跡が埋れてゐるかも知れませんが、今後積極的に古跡の調査を進めたいと思ひます。

昭和十二年十二月十八日發行滿洲日日新聞所載

### 問題の義經の墓蹟公主陵に在つた

十八日本紙に掲載された「源義經の墓」が公主嶺附近にあるとの記事は俄然全滿の史學家、考古學家の間に興味を投げかけてゐるが、十九日夜大連居住の日露戦役生残りの勇士の口から、この説を確實化せしめるやうな重要な墓蹟實見談が齎された。

墓蹟實見の主といふのは大連市浪速町二〇八に住む大分縣生れの菊池三郎氏<sup>(五)</sup>で本紙の報道を見て誰にも話したことの無い源義經の墓蹟實見談を本社へ齎したのである。

日露戦役當時氏は第三軍乃木將軍の指揮下にある第十四師團野砲二十聯隊第一大隊の上等兵として應召、同年八月十二日奉天の南方心臺子驛に到着、一夜同地に露營、蒙古横斷のコサツク兵に備へるため八月十三日同地を出發、高粱畑を抜けつゝ八月十六日鐵嶺西方后黃化嶺に到着、同地に駐屯した。

九月一日大隊長の命令により兵二名を従へた菊池上等兵は愛馬にうち乗り野砲二十聯隊の郵便物受領のため當時の第三軍司令部所在地法庫門へ、曉の闇を衝いて出發、左方の長柵附近に出沒する匪賊と闘ひつゝ、正午頃該地へ到着したが、砲兵隊の郵便物は法庫法の西方約三里「公主陵」の野戰郵便局にありとの命に再び道を轉じ午後三時ごろ目的地に到着して。その時菊池上等兵は該地に駐屯する我兵及び野戰郵便局員の口より源義經の墓蹟が同所の東北方入口附近にあるとの話を聞き、郵便受領までの一時間の餘暇を利用して墓蹟見學を行つた。滿洲の風物とは極めて異つた該墓蹟の光景は菊池上等



兵外二名の兵腦裏に極めて深い印象を與へたが、爾後足かけ約三ヶ年に涉り鐵嶺・海城方面に轉戦、遂に功成り名とげ勳八等砲兵軍曹となつて退役した。菊池氏は、今日までその當時の印象深い記憶を胸に秘めながら今日に至つたもので、當時の應召準備袋、軍隊手牒、地圖を前にしながら當時の情況を左の如く語つた。

當時私の參拜した墓は公主陵東北方の村の入口附近にあり、道路添ひの右側（村に向つて）にありました。その四邊の地勢は丘陵が多く墓蹟の左右及び後方も丘陵で草につままれた墓の左右の長さは約六、七間、高さ一間半以上もあつたと思ひます。墓の土臺もたしか石であつたやうに思ひます。殊に異様に感じたことは滿洲の各地で轉戦した自分の眼にまだ見たことのない内地風の松が墓の左右後方にあることで、この種の松は公主陵の村はづれにもありません。墓から二間ばかり前の草深い中に二本の石標があ

りました。巾一尺、高さ五尺位の四角の石標で、この二本の表面上部に内地の墓碑に見るやうな浮彫りの三枚笹龍膽の紋章がやゝはつきりと見えました。云々。

昭和十二年十二月二十一日發行滿洲日日新聞所載

## 義經の墓現存説有力化

### 寺院に残る記録も明かに經歷記載

位置は奉天省康平縣内

源義經の墓が公主陵附近にあるとの本紙の報道が更に波紋を描き出し、史學家、考古學家の異常なる注目を集めると共に、一般讀者の興味を沸き立たせ話題の中心となつてゐるが、廿三日朝またく源義經の墓蹟を實見したといふ日露戦役生残りの勇士が現れた——大連窯業に勤務する大連市大黒町五一



中村直吉氏(五)は既報墓蹟實見者菊地三郎氏と同様日露役當時十四師團工兵十四大隊第一中隊に所屬し、工兵一等卒として明治三十八年の八月より翌年三月まで墓蹟地附近に駐屯し、約八ヶ月に亘り日夜墓蹟を實見したといふ人である。大連禦業工場に氏を訪へば當時の記憶を次の如く語つた。

### 官民尊崇の的

過日御紙で源義經の墓蹟並に菊地三郎氏實見の記事を見て自分も其當時の事を思ひ出し貴社に御通知した譯です。菊地氏のいはれた心臺子とは新臺子、石仙寺とは石佛寺のやうに自分は記憶してゐます。法庫門から萬里の長城を越え墓蹟に至る方角は大體一致してゐますが、菊地氏の三里に對し自分は十里位あつたやうに思ひます。この道路は支那馬車の通れる程度のものでしたから巾一間以上あつたやうに記憶してゐます。

墓蹟は大體地圖に示したやうな位置にあり、菊地氏の發見したといふ石標も墓蹟の前面に一基ありました。自分の記憶では、その石標の表には文字が書いてあるやうに思ひましたが、或は笹龍膽の模様が書いてあつたかも知れません。墓蹟の前面の部落に我々工兵隊、その墓陵の後方に砲兵隊、工兵隊の東南に輜重隊、西方に騎兵隊約一ヶ師團の將兵が約八ヶ月間その附近に駐屯してゐたのですから相當當時のことを記憶してゐる人があると思ひます。當時我々の小隊長は工兵少尉星川久七氏で、この方は一昨年までは陸軍省第二國防課長をお勤めになつてゐたやうに思ひます。中隊長殿は一年志願の北〇大尉(一字忘失)でした。星川少尉殿は當時二十歳を少し出た位で非常に頭腦明晰な方で、師團司令部の命令で原駐地附近周圍十里の地圖を測量班と同様に作製されましたからこの方にお質ねになれば同方面の地勢、情況は詳細に判ると思ひます。



また中隊長殿は中學校の漢學の先生をなさつてゐた方ですが、私が中隊長殿の從卒から聞いたところでは墓蹟左方の寺院の僧侶が源義經の記録であると中隊長殿へ一書を呈し、中隊長殿はこれを讀了され、明らかに日本の源義經同様の經歷を書いたものであつたことを認められた由です。自分は滿洲事變當時も通譯で從軍し多少は滿洲語も判りますが、駐屯當時この滿洲語に似た言葉で、附近に住んでゐる兒童達に、この墓陵には誰が葬つてあるかと尋ねると、どの兒童も源義經と漢字を書いて見せました。墓陵の前面、即ち道路を隔へた部落の入口には保安局のやうなものがあり、局長その外二十名ゐましたが、これらは胸から腹にかけて赤い丸のある例の袖なしのやうなものを着てゐました。これらは墓陵を護つてゐたやうです。我々の駐屯してゐた部落民もこの保安局員も非常にこの墓陵を尊敬し病氣の時には圖に示した第二の門まで進み、これを禮拜し病氣平癒を祈ります。

ある日我々の工兵隊員が一行方不名になつた時その寺の僧侶が、それは狼がついたのだから、おがめば歸るといつてゐましたが、偶然か三日目に歸つて來たことがあります。

兎も角長い間の駐屯で相當記憶に残つてゐますが、詳細のことは星川氏が御存じと思ひます。墓陵の位置は奉天省（蒙古との國境）康平縣であつたと記憶します。

以上の如く氏の談話により、更に源義經の墓蹟現存説が有力化するに至つたが、これにより大連在住の史學家方面でも愈々實地調査に乗り出すのではないかと見られてゐる。（地圖は中村氏の書いた同方面の地勢及び墓陵附近）

### 成吉思汗の像にも笹龍膽の紋章

「源義經の墓が公主陵附近にある」との本紙報道は史學、考古學者間にセン



セイションを起し、その調査が各方面に行はれてゐる。発見者として名乗り出た大連市浪速町二〇八菊池三郎氏の實見談に依つて我社では鐵嶺支局をして公主陵の調査を行はしめたところ、同所附近には公主陵と稱するもの二、三箇處存在し菊池氏の目撃せる公主陵がいつれの公主陵なるか未詳で、今後更に調査を繼續することゝなつたが、成吉思汗及び源義經に關し再三滿蒙各地を跋涉、既に「成吉思汗は源義經也」外二書を物してゐる小谷部全一郎氏の著書より、源義經と公主陵及び笹龍膽の諸關係の部分を取上げて見ると

「余の知人にして日露戦役當時或筋の命を含み、深く滿蒙の地に入り、土民軍の頭領となりて各地に出沒し、先年我國のシベリア出兵に際し、召されて陸軍通譯官となり、北滿に勤務せる勳五等大津吉之助といふ人あり、氏曰く、滿洲の公主嶺は蒙古語のコンズレンにして、譯せば王陵といふ、驛の西北二十餘清里蒙古達爾罕領の公主陵嶺に達爾罕王族に屬する二兄弟

の墳墓あり、この兄弟は乾隆帝の姪に當る皇女を妻とし、こゝに合葬しあるにより蒙古人は傳へて格々兒陵と稱す、此處の古墳の碑面に笹龍膽の紋章を刻しあるを確かに目睹せり、また北滿の土人は成吉思汗のことをクロトと呼ぶなり、大津氏また曰く、古來蒙古の武人が出陣の時に冠る兜に笹龍膽の紋章を附くるを例とす、蒙古人はその紋の由緒を知らざるも昔より因習的にこれを射すなり、而して彼等はその形の何なるやを解せざるにより、今は笹の葉の尖りたる部分を上にして花の方を下にして兜につけるなり、これは倫敦のブリテッシュ博物館に藏する成吉思汗の古像の服裝に笹龍膽の紋を附するに對照し史學上逸すべからざる重要事項なり」

と書いてあるが、右記録より見て菊池氏の笹龍膽を刻したる石標を見たることは事實なりと思惟される。史學界の權威大連圖書館島田氏は本紙の報道その他より検討し、菊池氏の発見したのはむしろ公主陵の古蹟でなく法庫門西



方王爺陵のことであらうと鑑定してゐるが、その外雙城子（ニコリスク）の古碑に笹龍膽の刻しありたる史文もあり、またハバコフスクの博物館にもその地方より發掘せりといふ日本式の古き甲冑の一部及び笹龍膽と木瓜の紋章ある朱塗りの古き經机ありといはれてゐる。兎も角笹龍膽の刻せられたる石標がかつて或は現在も存在してゐるであらうといふことは一般に信ぜらるるに至つた。

昭和十二年十二月二十四日發行滿洲日日新聞所載

### 源義經として信仰する土民達

「源義經墓蹟在滿説」は墓蹟を實見したといふ人々が秘められた参考資料、記憶をば續々本社に提供、本社では墓蹟附近の支局を總動員して墓蹟の存否、笹龍膽石標の有無、源義經に関する文献の所在、並びに墓蹟が果して源義經と關係ありや否やの調査を進めてゐるが、公主嶺識察署長として永らく同地に居住してゐた奉天青葉町二十六番地居住板橋喜久治氏は次の如き意見を發表した。

私は公主嶺勤務當時懷德縣住民の生活状態を種々調査しましたが、或る時土民の入口に「源義經」と大書した赤い紙が貼りつけられてゐるのを發見住民に尋ねて見るとこれは「源義經」といふ一種の宗門と答へを得ました。私はこの時以來義經入滿説に非常な興味を抱くやうになり、先づ「源義」の由來について調べて見ると、その昔日本より渡來した日本人によつて開かれた教義で當時は附近一帶はこの教への信徒のみであつたと住民は語つて居り、更に開教者は懷德縣より蒙古に向つたが約百支里の萬壽山に於て死亡したとも語られてゐました。段々調べてゐると事實懷德西方の萬壽山といふ山には何人かの立派な墓があることが判明しました。義經入滿説によると義經は沿海蘇城を経て入滿したといはれて居り、吉林には十八



山伏の像があり、法庫門附近にもこれと同様の像があると聞いてゐます。この経路を辿つて見ると菊池氏の公主嶺墳墓説も一應考へられますが、私が調査した範圍では公主嶺よりも萬壽山の方が有力なやうに考へます。

### 貴重な資料軍用地圖を提供

生残りの勇士森氏

然るに二十三日午後、大連市磐城町六〇森藥舗主森繁八氏(五)は、墓蹟存否に關する重要な資料、即ち氏が第十四師團通信所長として活躍した當時使用してゐた詳細な軍用地圖を本社に提供墓蹟調査の前途に光明を與へるに至つた。右地圖は同氏の古き軍囊深く秘められてゐたもので本紙の記事により思ひ出した氏は、この地圖を探し直に本社へ調査資料として提供したものである。氏は次の如く語つた。

自分も公主陵に駐屯してゐました。地圖にあるとほり、その時十四師團司令部が公主陵、その西方の王爺陵と北方の老陵にそれ／＼旅團司令部があり、自分は師團通信所長として公主陵に約半年ゐました。こゝに師團司令部があつた關係上、旅團或は獨立聯隊から命令を受領すべく毎日連絡兵が頻繁に往來し、この連絡兵達の間には源義經の墓蹟存在説が有力に傳つてゐたことは事實です。二十四日貴紙に掲載された中村氏の談話にあつたやうに、この陵は長柵にぐるりをかこまれ草が蓬々と密生してゐました。前方の道路は巾約三間半で立派なもので、自分も一回丈その柵の外から見ました。柵は五、六十年経た直径五、六寸位のもので記憶します。その墓陵前方の部落が司令部所在地で有福な民家ばかり約五十戸あまりあつたやうに覺えてゐます。この地圖は墓蹟調査に必要なだらうと思つて御通知した譯です。

昭和十二年十二月二十五日發行滿洲日日新聞所載



## 成吉思汗は義經か

### 「コンズレンの謎」を探る

文治五年閏四月（西暦一一八九年）衣川の戦ひで藤原泰衡に亡ぼされた筈の源義經が、こつそりと日本歴史の巻中から抜け出し、滿洲に渡つて更に秘境蒙古に入り西暦一二〇六年斡難河畔に即位して成吉思汗となり、十三世紀の初葉ヨーロッパを震撼せしめた……としたら、それは大和民族にとつてなんと素晴らしい魅力的な歴史ではないか、ところが、この物語りめいた新説解明の前提条件ともいふべき「義經渡滿の史實」が、最近在滿邦人から續々提供される「義經の墓蹟」に關する資料によつて肯定的な色彩濃厚となり、これを單なる物語りとして聞き捨て得ないセンセーションが捲き起された。

折も折本月上旬奉天鐵道展自動車係、ツーリスト・ビューローの組織する調査隊によつて法庫縣の公主陵に墓蹟發見の報もたらされ、義經渡滿説の焦點がこゝに集まつたので、記者は雀躍王陵の地コンズレンの謎を探るため四日現地に急行した。

法庫縣城は滿鐵本線鐵嶺驛から約五十軒の西北方に當り、午前十時民間經營の鐵法バスで鐵嶺を立つと正午法庫に着く、こゝに奉天鐵道局奉天自動車區法庫停留所があり、記者は同所主任中野權四郎氏に迎へられ同所から出して貰つたバスで、直ちに公主陵探訪に向つた。一行は記者と淺島寫眞班の外宮本副縣長、中野氏夫妻、奉天鐵道警護隊横田巡長に縣警務科の警官三名を加へて九名、公主陵は法庫の西方約十五軒、馬車道や畑の中の凹凸道突き切つて行くため四十分位かゝつて漸く目的地に着く、この地帯一圓なだらかな丘陵が起伏してその丘のゆるやかなスロープ一面が三、四寸の芝に蔽はれ



て非常に閑雅な風景だ、この丘の麓のところへに行儀よく生え揃つた松の森があり、森のある所に七ヶ處の陵廟がある、道順で第一番目にあるのは娘々廟、第二番目は成吉思汗の後裔で博旗二太王の陵といはれ、第三は大平天國の亂に功績をのこし一八六五年曹州で陣歿した僧格林沁の陵、第四番目が問題の陵で略々同じ箇所四つ少し離れた廟の奥の一つ、都合五つの墓があるが誰のものだか全然記録に残つてゐない、同様第五、第六の陵も何等記録なく墓守の老人に訊くと「わしは六十歳になるが、生れる前のことは知つてゐる筈がない」と取りつく島もない返事だ。

問題の第四番目の陵はやはり後になだらかな丘を控へ前方二丁餘に小川が流れてゐる芝原に南面し、基盤の目のやうに規則正しく並んだ松林の中にある。幅三尺高さ一丈位の門のある、高さ七尺前後の土塀に囲まれた十坪餘の墓地が三つ東西に並び中央の墓地に大小二つ左右の墓地に各一つの土饅頭が

ある。その大きさは中央墓地に向つて右のが一番大で、高さ七尺位、その左のは墓石が残つてゐるだけ、向つて左の墓地のが、その次に大きく高さ六尺餘、右端のは小さく高さ約四尺餘、いづれも永年手をかける人がなかつたと見え墓蹟は荒れるに任せ、崩れ落ちた塀の瓦やらが邊り一面に散亂して荒涼たる有様だ。調査隊の奉天鐵道局營業課自動車係の石川豊水氏（衣川の出生）によつて笹龍膽の紋が発見されたといふ墓は、その左端墓地のものだ。問題の「笹龍膽」の紋は何處にあるか、その墓を上から下まで仔細に調べて行くと、丁度土饅頭のすぐ下の土臺の五尺四角の正面に一見日輪型の模様（外側は三寸位の方形）が二つ並んでゐる。よく注意して見ないと看落すが、この日輪型の中央にも一の模様が浮彫りされてゐる。それが笹龍膽だ。いや注意して見ても永年風雨に曝され磨滅したこの模様は素人が直に笹龍膽と斷定を下すのは危険だと思はれる位、原型が崩れてゐる。素人ではあるが相當な



義經研究家の石川豊水氏もこれを笹龍膽と断定したし、確にさうと推定出来る節もあるが、兎に角専門家の鑑定を求めため持参の白墨で模様を浮き出させクローズ・アップをカメラに収めた。その時同行の宮本副縣長は

これは兎に角權威者に一度見せるとして取敢ず柵でも作つて保存しなければなるまい。

と洩らした。

昭和十三年三月八日發行滿洲日日新聞所載

### 成吉思汗は義經か

コンズレンとは蒙古調で王陵の意だ。王族又は高貴な身分のものが死んで再びこの世に生れて來るとき王族として更生する爲には、その資格にかなつた墳墓の地が選ばれなければならぬ、柔い芝草に蔽はれたなだらかな丘の起伏、幽玄な松の林など公主陵は典型的なコンズレンと言へる。ところがこの

近くにも一つのコンズレンがある。法庫縣境を西に超えると科爾沁左翼東科前旗の入口にある王爺陵がそれだ。舊臘大連の菊池三郎氏が日露戦争従軍當時の記憶を辿り、義經の墓蹟は公主陵にあつたと興味ある實見談を發表したに對し同じく同戦役の勇士で大連市の中村直吉氏が有力な資料を提供して墓陵の位置は確か奉天省（蒙古との國境）康平縣であつたと記憶すると語つて本紙を賑したが、中村氏はこの王爺陵を指したものだ。こゝにも四つの陵があり、一帯の景色は公主陵と非常に相似してをり場所も相隣つてゐるので古い記憶を辿つて區別することは難しい、菊池、中村兩氏の主張の誤差も、この邊にあるのであるまいか。王爺陵の方には相當判然した記録がある。二月六日中村氏等が同陵を視察した時に得た資料に科爾沁左翼中旗の世代歴譜相傳至一覽表なるものがあり、左の如く記載されてゐる。

▽由成吉思汗十七世莽古斯 崇徳二年遙封子二女



▽同十八世長子宰桑 順治十一年封王

▽同十九世滿珠習禮(第五史也)

▽同廿世長子和塔 康熙四年和碩達爾罕親王

▽同廿一世長子班第 康熙十二年二次封王進固倫額付康熙九年尙和碩端敏

公主卽世祖從兄女也雍正元年進封固倫公主

以下廿二世長子羅布藏滾布、廿三世布西巴拉珠爾、廿四世長子額爾科巴鄂

勒哲穆爾、廿五世嗣子鄂勒哲圖、廿六世從子齋克默特、廿七世嗣子棍楚克

林沁、廿八世長子那書圖、廿九世長子達賚、三十世長子達木林札布(二等

臺吉、民國十九年襲固山貝子)

とあり、成吉思汗以降最近に至るまでの系圖だが、その始まりが第十七世の後裔で崇徳年間のことだから約三百年位前の事である、兎に角この記録によれば王爺陵にはそれらしいものはない。

そこで再び焦點を公主陵に戻す。今回の調査隊の發見に本紙所載の菊池、中村兩氏の資料が非常に役立つことは勿論だが、こゝに又一つ重要な資料が提供された。提供者は元第一師團高崎第十五聯隊附軍屬として日露役に従軍した長崎縣人の大日向千萬之助氏で、前記兩氏同様、これ亦日露戦役の勇士であることが興味をそゝる。同氏の實見談を得た徑路は別の事情で言明出来ないが、その内容を要約すれば

一、明治三十八年五月ごろ出征中法庭門から西北約五里の娘々廟に行軍演習中その附近で義經の墓を發見した。

一、廟内に四ヶ所の土饅頭あり上方の二ヶは國王と妃の墓で下方二ヶは内大は義經、小は義經の子の墓と思はれる。

一、土饅頭の前方約一丁餘のところの高さ九尺、幅六尺位の花崗岩の碑あり、碑文を當時寫し取つてゐたが、大隊長の吉野有武氏が、これを印刷して皆



に配布すると取上げたまゝ、その後の消息はわからない。

一、碑文の大意は、義經の一行はシベリヤに渡り、その後この娘々廟附近に至つたが辨慶は附近を視察中國王のため虜はれた。その後一行三十六名は悉く國王の食客となり、日を過してゐる内偶々奉天方面より攻撃された時義經等は國王に進言し兵幾許かを借れ敵を邀撃して大いに破つた。國王その勇に感じ、これより大いに一行を歡待した。その後義經は進言して和をなさしめた。この時義經は妻を迎へてゐた。

一、碑文の右方に七間に二間位の建物あり、これは一行の所持してゐたと思はれる武器一切を納め保存してある。その武器の大半に笹龍膽の紋を彫刻し、又は塗り描きしてある。又辨慶を虜にしたといふ繩（徑一寸位）も保存されてある。

といふ記録だ。

昭和十三年三月九日發行滿洲日日新聞所載

萬古に亘り千歳を経て變易せざるものは眞理なり。我國の所謂史家等が如何に曲筆を振ひて私の説に反對するも、眞理には敵し得べくもあらず。前掲の記事の如きは、社會の耳目たる滿洲日日新聞社が、世人を偽く爲めに殊更に捏造せるものにあらざるや論を俟たず。義經入夷の事實に反對する海島國の史家等には、百千の雷霆一時に耳邊に落下するの感あるべきも、畢竟是れ自業自得のみ。其足一步も實地を踏まず、古文古記を唯一の論據となして史を斷ずるの時代は既に過去の夢となれり、彼等宜しく青紙表より更に一步を進め、宇内に存する自然の大書籍に目を晒し、活きたる學問に精進して祖國に盡すところあるべき也。藏倉孟子を誦れども誰か孟軻を賢ならずとせん。他の毀譽褒貶の如きは我に於て何かあらん耶。



世界の趨勢は榮枯盛衰の理に洩れず、英佛は萬花駘蕩の麗春去つて枯葉凋落の秋冬の期に移らんとするの景狀にあり。また猶太人等が露帝國を篡奪せるも、元來亡國の遺民なれば、治國平天下の要諦を解せず、自國の重要人物を牛馬の如くに殺戮する亡狀を敢てするソ聯の前途亦知るべきのみ。北米合衆國も建國當時の敬虔にして英邁なる純米國人の子孫等は、北方のポストン地方に其の影を没し、今は代替りとなりて、勞働と經財の全權は殆ど猶太人に掌握せられ居る状態なれば、之亦算盤と術策以外に出る氣勢なきに似たり。此間にありて日獨伊の三大國は、威風堂々四隣を壓し、將に天下を席卷せんとするの概あり。我日本の現在は昔日の錯國時代に於けるが如き倫安を許さず、舉國一致以て自國の運命を決せざるべからざるの秋にあり。支那との長期

抗戰も要するものは金にて、政府は固より民間業者にありても旺んに金鑛の發見に努め、徳川時代に於て既に廢棄せられたる金山を更に發掘し、或は當時金の含有量の尠なかりし爲め、棄て、顧みざりし礦石までも拾ひ集めて鑛爐に投ずる今日なるに、石塊以上に貴重なる自國の英雄を學者は棄て、顧みざるは何ぞや。七百年前の鎌倉時代に、戦死と偽りて本國を遁れ、歐亞の天地を馳驅し、覇者たるの威を示し、八荒を懾伏せしめたる英傑義經あり、吾人之を顯正して公の靈を慰め、併せて世道民心に裨益するところあらしめんとするに對し、學者其の非を論じて逆まに公の偉業を一管の筆に抹殺して顧みざるが如きに至りては、唯長歎大息の外なき也。

現代の所謂モダン婦人等の不心得も亦然りにて、我皇國は長くも神



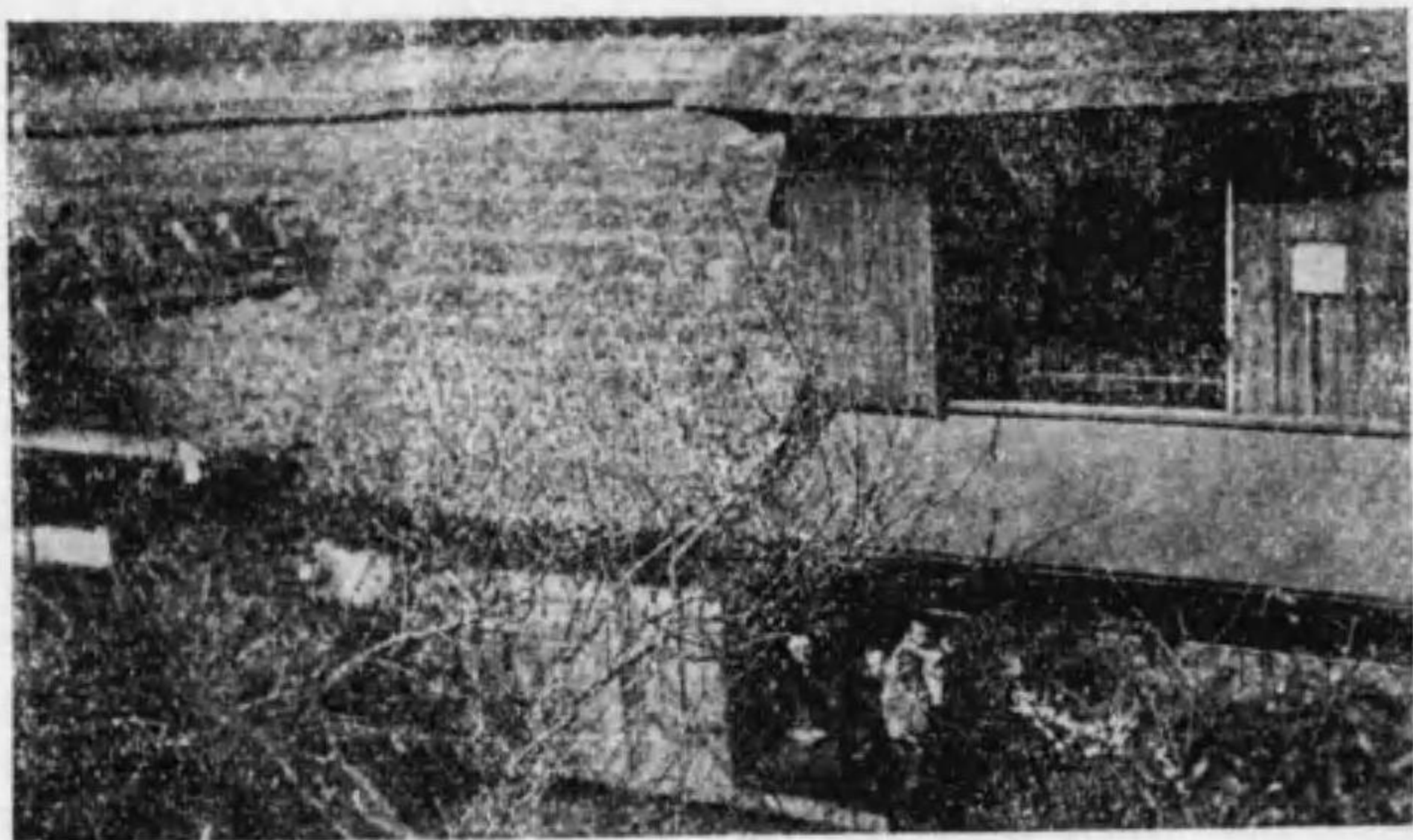
聖なる大日靈尊の勅命に因り開國せられ、有史以後にありても、倭姫の敬神、狹穗姫の節義、乙橘姫の貞烈、神功皇后の果斷、清麿の姉の義膽、袈裟の守操、常盤の苦節、靜女の貞淑及び忠興光秀重成等の妻より、楠公夫人、春日、淺岡などの烈女節婦を出し、近くは乃木靜子を産したる女神の國なるを思はず、漫りに現代風と稱して斷髮洋装ハイヘル靴に足指の痛むを忍び、固來直きを貴ぶ直髮に無理に焼燙を當て、黒奴女の如くに縮毛を装ひ、和食よりも洋食に舌鼓を鳴らし、巻煙草を薫らし洋酒を飲み、天上天下唯我獨尊といふ風に大道を濶歩横行するが如きは、之を舉止端雅にして高廉貞淑を特長とせる我日本婦人の典型なりと謂ひ得べきや。余は遺憾ながら疑ひなき能はざる也。

## 五 晩年の平安

私の父は永年判檢事を勤め、日向の宮崎地方裁判所の檢事を、最後の御奉公として退職し、多年司直の府にありて、民心の荒廢せるを實見し、之を憂慮せる故なるか『眞教要論』と題する一書を、大阪の福音社より發行すると共に、宮崎に留まりて基督教の自給傳道に従事し、多くもあらぬ資財を費したる爲め、父が没してより二年の後に私は米國より歸朝して見るに、遺産とては一錢も無く、唯だ子孫に遺すものなりと卷末に記したる自筆の赤穂四十七義士焼香の繪卷物一卷のみなりし故、家産を相續すると云ふ面倒もなく、加ふるに親戚縁者とても



なき身なれば、私が歸朝して後の行動は不羈磊落、恰も手綱のなき奔馬の如く、非營利的なる宿望に直往邁進して、家計を顧みざりしより、老後は當然困窮に陥ゆるべき筈なるに、天の審判と御恵みは不思議なるものにて、微力ながら多年世の爲めに眞心を盡し來れる事に對し、天は數倍を以て之に酬ひ給ひ、老後の不安もなく、居宅も北に山を負ひ、東南展開して海にも近き現住所に定めしめたまはる筈、唯だ感激と感謝あるのみにて、百祿を天より受くとは、吾等が老後の晩年にふさはしき格言なるが如くに思はる。之に就て想ひ起さるゝは、「一年の計は元旦にあり、老後の計は少壯の時にあり」といふ古人の言なるが、唯だ己れの老後に備ふる爲めのみには汲々として機械の如くに働くは、無味乾燥、人間の干物の如くにして活き甲斐なき様に思はれ、社會の



家 京東市内に稀なる等葺葺の家の  
米國博士和装の訪問(左端)

公人としても、完全なる意義を失ふものにて、少壯の時は寧ろ老後の事などを思はずして、一意國と人と神の爲めに、全心全力を盡して、働いたけ働くに於ては、老後の計をなさずして老後の計は、自ら天より授け給ふものなりといふ事是れなり。

吾等が大井元芝町の住宅は、古色蒼然たる葺葺の二階家にて、夏は涼しく冬暖かく、清冷なる水は滾々として山より湧き出て、水道の必用な





く、庭園は果樹に圍まれて自然に其の實に恵まれ、朝は梅樹を慕ふて飛び來る鶯の聲に目を覺まし、夜は梟の啼き聲を聽きて眠りに就くなど、之が東京市内かと疑はるゝ程の閑靜なる處にて、天の厚き御恵みを感じしつゝ、春は妻と相携へて玉川河畔に櫻花を愛でながら芳草を摘み、夏は三浦半島白砂翠松の海濱を逍遙して月下に吟じ、秋は武州御嶽山の幽谷に紅葉を探りなどして、悠悠自然を娛しみ、家居しては老後の社會奉仕として私は孜孜筆硯に従事し、老妻は家事の傍ら餘念なく歌道に新しみ、私に相談もなく何時の間にか、大日本歌道奨勵會の會員となりて、其の會の月刊冊子『歌』に寄稿する都度、選歌の中に掲載さるゝまでに上達し、毎號の同冊子に、畏くも各宮兩殿下の玉詠をも掲げ奉れば、名譽のことゝして本人は暇ある毎に詠草に耽けるを、

唯一の樂みとせるなりき。茲に冊子『歌』に掲げられし菊代の詠みたる和歌の一部を録して、思ひ出の志のぶ艸とするになむ。

### 時 計

たえまなくめくる時計の針のこと

はけまさりしをくやむこの頃

### 幼 な 心

うつくしき幼なこゝろのましはりを

とつくにゝまてむすふ御代かな



春 月

かすむ夜の月をし見ればふるさとの

花のさかりそ思ひやらるゝ

胡 蝶

さくはなにけふもうかれてたのしけに

はるのなかき日まふこてふかな

花 一題十首詠

たま川の水にうつろふさくら花

心すみゆくなかめなりけり

かにかくに花のなかめは長閑なり

世は常ならぬ姿なれとも

朝夕にすかたうつしてさくら花

池のかゝみによそひつくるふ

歌おもふひまこそなけれ咲きそめし

都の花を訪ふ人の來て

家

雨風にのきもひさしもかたむけと

訪へはたのしき友のいへかな

菊



はなゝからそのゝしるしとあふかるゝ

きくのかほりのなつかしきかな

夏 窓

あさかほの日ことにかはるはなのいろ

まとうちあけて見るそたのしき

旅 梅 雨

つもるうさはらさんものとたちいてし

たひのそらにはさみたれのふる

野 冬 枯

ふゆかれの野へのなかめのひろきかな

千くさのはなのころにくらへて

心 悲 し

あはれなる友をたすけむちからさへ

なしとおもへは心かなしも

珍 客

久にして逢ふそうれしき伊勢詣て

かへりついてに友のとひきて

年 賀 端 書



御代いはふこゝろは同じ年ほきの

端書にしるす言葉かはれと

蜘蛛

一寸ちの糸をたよりにさゝかにの

こゝろ細けのたつきなる哉

笑

學ひやのつとひに老もわかゝへり

おのつと笑ふ聲もたかまる

夜聽雨

しつかにもまくらにかよふあめのおと

いねこゝちよきはるのよはかな

青葉

みつえさす青葉もりくる夕日かけ

見てたつまとの風こゝちよし

晴雪

日ならへて降りしみゆきの今朝はれて

瑠璃の世をみるこゝちこそすれ

水



のとやかにはるうたふことはなのかけ

のせてなかるゝさとかはのみつ

秋庭

朝かほも日毎にかれて庭の面は

さひるゝ色のふかくなりゆく

歌會

とりくことにこと葉のはなをさかせつゝ

うたのまとゐのゆかしくもある

老樹

花の香のなつかしきかな老梅の

苔むす幹のさまもみやひて

裸體

誰か目にもあさましと見む油繪の

若きをみなのはたかすかたは

少女

こゝろして育てこそすれ妻となり

母ともならんをとめ子のみは

青年團



いかはかりくにのつよさもまさるらむ

せいねいたんのちからそはりて

暗夜

銃の音やみ夜にひゝきもの凄し

み空をふせくいくさならしは

骨

勇ましやみくにのためにつはものゝ

いくさのにはに骨さらすとは

新緑

花めてし目にあたらしきさみとりの

なかめは更に美しきかな

以上の國風の中にて、同冊子の天地人の選歌の部に掲げられたるもの數首ありしが、本人は私にもまた何人にも語らず、黙して居るを常とせり。或日私は菊代の留守中に、何心なく歌の冊子を開き見しに、本人の和歌が秀逸の部に掲げられありし故、歸宅後祝意を表して、何時の間に誰を師として歌よみになりしぞやと尋ねたるに、『天性好む道とて誰に教はるともなく、自然に心に浮ぶまゝを詠んだものです。之を人に告げませんのは、たゞ自分の心を慰めるため、人に見せるためのものでありませんので、歌のことは一切誰にも語ったことがあり



ません』と。菊代の謙遜振りは概して此の如く、之がまた日常の總べての言動にまで及び、眞に女らしき純粹なる日本型の女性にて、而も外柔にして内剛、凛々たる女丈夫の魂を中に宿せるなりき。官立東京商科大學生にて、今春卒業の上、大阪住友株式會社へ入社契約濟となり居る拙息全助は、母の没後私に語つて曰く『父さんに口八釜しく言はれて怒られても怖くはないが、だまつてゐる母さんの方がとても怖かつた』と。之はありのまゝ正直に母の全貌を告白せるものにて、沈黙の裡に愛と威とあらゆる情緒を藏し、其の貴き精神は眞綿に包まれたる寶石の如くにてありき。慾を言へば、今二十四五年生存せしめて、子や孫達より米壽を祝はれ、其の喜ぶ顔を見たかりしに、美しき花の手折らるゝが如く、病痾の魔手に無慘に手折られたるは、終生の

恨事にて『うつくしき人の枕きてし敷妙の吾が手まくらをまくひとあらめや』の萬葉の一首を誦して吾は泣くなり。



## 六終 焉

昭和十二年の春の彌生の空懐かしく、玉川の久地の梅林に遊びて歸りし頃より、菊代は風邪の氣味にて熱など出て、醫師に診斷を乞ひしに、永年の過勞の結果もありとて、轉地靜養を勧められたれば、海に近く暖かき適當の地を選定せんとて、私は房州半島の探見に赴き、房州館山の鏡ヶ浦は、波靜かにて氣候も宜しければ、此地の一流旅館に賄付下宿の事を取極めて歸京し、手廻物などを房州に送り菊代を遣したりしが、本人も家を持つて以來始めての轉地保養なれば、非常に喜び一ヶ月程此處に滞在せしが、或日電報にて至急來てくれと申送られ



館山鏡ヶ浦の河口

たれば、私は驚いて赴きたるに、今日にも他へ轉宿したしとのことにて其の理由に曰く、平常宿の女中に目を懸けて使ひ居るより、馴れ親みてありしが、先日夕食の膳を運び來り、私が煮肴に箸をつけ様とすると、女中はとゞめて、それを食べてはいけませんと云ふので、不審に思ひ其の譯を尋ねしに、今朝その肴に蛆がわいて居りましたので、先程料理をしてゐる宿のおかみさんに、其の事を



咄して止めさせようと致しましたが、おかみさんの云ふに『かまはな  
いよ煮ればわかるものでない』と申してお膳につけたのが、此のお肴  
ですとの事なれば、今後何を食べさせるか知れず、切角保養に來て却  
つて病氣に罹る様なことがあつてはつまらぬ故、早速他へ宿を替へて  
くれよとの事にて私も驚き、急に適當の宿を探すに奔走せるなりき。  
幸にして此の忠實なる女中が居りし故、厄難を免がれたりしが、若し  
注意する者なかりせば、危ふかりしことにて、一般旅客の参考にもと  
思ひ、ありのまゝ記すなり。

私は各處を尋ねて、近くの北條の海岸に、渚の家といふ温泉旅館あ  
るを見出し、此處に宿を定めて菊代を滞在せしめたるは昨年六月に  
て、宿は鐵道省の監督の下に北條町役場の經營にて、松林の中に建て



(きりあ家棧の等吾に林松の上左く遠) 影全の町倉千州房

られたる宏壯なる一軒家にて海にも近け  
れば本人も喜んで居りしが、此の旅館の  
規定として、毎年七八の兩月は、鐵道省  
より避暑客を此の宿に送るため、普通の  
客は一週間以上滞在する事が出来ぬとの  
ことなれば、七月に至り菊代は再び他へ  
轉宿するの止むなきに至り、私は房總の  
適當地に住家を求むるために奔走し、北  
條の東方汽車にて三ツ目の驛なる千倉町  
を選定し、此處に轉ずることにせるなり  
き。



房州千倉の海岸は、東方に直面せる廣き砂濱にて健康地なれば、此地の松林の中に建てられてある小説家菊地寛氏の別邸の隣りに貸別荘ありしより、此處を借りて菊代を住はせ、夏のことなれば私も毎日曜に行き海水浴などして、楽しく消夏してありしが、やがて夏も過ぎて初秋の頃となりてより、近隣の別荘主は皆な東京へ引揚げ、急に寂寞たる松林の一軒家となり、御用聞きの商人も出入りする者なきに至り、町には遠ければ不自由と不便にて我慢にも住つて居れず、又復た宿替せねばならぬこととなり、斯くして居る中に菊代はまたも風邪に犯されて熱も高かりしかば、此際寧ろ入院して、根本的に治療せしむるに如かずと思ひ、私はまたも適當なる土地の選定と病院の選擇などのために房總の各地を探見に歩き、遂に外房州鴨川の郊外なる東條村に

東條病院と云ふがありて、此處を適當と認められたれば、菊代を此の病院に入院せしむることゝせるなりき。

東條病院は海と山との中間に位する高燥の土地に建てられてあり、院長も副院長も醫學博士にて、他に多くの醫師看護婦等も居り、構内に平家建の病室數棟を有する堂々たるものにて、此の外に重病にあらざる者の爲めに、療養所の如き一棟あり、日當りも良く空氣の流通も宜しければ、菊代を此處に住はすことゝせり。毎朝六時に看護婦の豫診に来るあり、同八時には醫師の巡診ありて、設備も完全なれば、本人も大満足にて相變らず和歌に親しみ讀書に耽りなどしてありしが、冬期に入り寒氣の加はるに連れて病勢も進み、正月を東京の自宅に於て迎へ樂まんなどゝ云ひしこともあたとなり、此處に越年することゝ



なりしより今年一月二日に私が年賀を兼ねて東條へ見舞に行きしときには、元氣にて良く眠むられ食欲もありとの事なれば、此の分にては回復疑ひなしと喜びつゝ、院長に面會して本人の容態を尋ねたるに、此の寒中を無難に過ごせば平癒の望みありとのこと、私も安神して歸京の途に就きしが、正月休みのことなれば急ぐ必要もなく、途中下車して、以前宿泊せる北條の温泉旅館渚の家泊りしが、主人は私を見て大いに喜び、其の夜私の室に来て云ふに、先頃東京新英社發行、曉烏敏先生の著『凡夫の道』といふ本を購入して讀みたりしに、其の中に東京厚生閣發行、小谷部全一郎先生著『日本及日本國民之起源』といふ本の要點を抜萃して轉載し、之に同氏の批評を加へ、天下一品との好評なれば、曾つて小谷部全一郎と云ふ人の名は聞き覺へあり、若

しや毎度來て此の渚の家にお泊りになる小谷部氏にあらずやと思ひ、深夜ながら起きて帳場に至り、宿帳を調べたるに著述業小谷部全一郎とありし故、此の人に相違なしと思ひ、次回お出でになつた節には是非お話を拜聽することを樂んで居りました云々と。私も主人の厚意を嬉しく思ひ、夜のふけるまで歡談し、翌日別れを惜みて歸京せるなりき。

越えて一月十一日に至り、菊代より電報あり『スグキテクダサイ』と。平素遠慮深き本人に此事あるは、容態の悪しきが故なるべしと想ひ、愁雲憂霧に吾が胸を銷されながら、『デンボウミタイマシグユク』と返電を送り、倉皇として兩國驛に至り、房總行の汽車に乗りたるも、四時間以上を要する遠距離なれば、東條に着きたるは午後五時にて、直



ちに菊代の室に至りて見るに、本人の血色といひ態度といひ以前と變らざりしより、何故の送電にてありしやと尋ねたるに、急にあなたに御面會したくなり、院長は電報を送る必用があれば病院より送る故、患者が直接打電などをしてはならぬと禁ぜられて居りましたが、今朝密かに看護婦に頼んであなたへ電報を打たせました云々と語り、其れより種々要談などせしが、所謂蟲が知らせるとも申べきか、本人も私もそれとあからさまに言ひ得ざりしが、談話中諷諭を以て遠廻すにあととの事などを語り、本人は指にはめたる紀念の金指環を外し、これを長女の伊佐子に遣つて下さいなど、云ひ、小遣錢の遣ひ餘りを入れたる財布を私に渡すなどするより、不思議に思ひつゝも、知らず識らず私もそれに引きずられて、『死など、いふものは、眠むつて起きぬ

までの事なれば恐るべきものでなく、在天の父の御許に歸へることであれば、慶ぶとも悲むべきものでない』など、語り聞かせ、本人もまた『今は支那との戦争で、多くの若者が戦死して居るのですから、生にこだわつて慾をいひば際限がないのです』など、云ひ、互に禪僧の問答の如くに咄し合ひ、何時果てべくも知れず、餘り話させては、本人の病氣の爲めに宜しからずと思ひ、『其許は黙つてゐて、今度は私にばかり話させてくれ』と云ひて、先日私が東京への歸りに、途中下車して北條の渚の家に泊りしとき、宿の主人より聞きたる私の著書の顛末を委しく語り聞かせたる後、吾れ知らず菊代の枕頭に兩手をつき、言葉を改めて曰く、『斯くの如く私は到る處で人の稱讚を博し、且つ尊敬せらるゝは、皆な其許の内助の力です。私は書齋にばかり引籠つて、



家の事を何もせず、其許にのみ苦勞をかけたことは、今更申譯がない』と涙だ聲にて禮を述べたるに、本人は無量の感に打たれたるものゝ如くに聞き終り、「最早夜も遅くなり、風呂もお仕舞ひになると思ひますから、宿へ歸つてお休み下さい」と言ふより、其の意に従ひ『それではゆつくりお休みよ』との一言を残し宿に歸りて一睡の間もなき午前三時頃に、看護婦は遽たゞしく私の部屋の戸外に走せ來り、うるみ聲にて『大變です、早くお出で下さい、奥様は御危篤です』と。私は長途の旅の疲れに前後も知らず眠りてありしが、之を夢か現つゝと想ひ、再び眠りてありしに、再三看護婦が呼びに來るより、愕然蹶起して病室に到り見るに本人は未だ少しく意識ありしより、『私が來てゐる氣をたしかに持てよ』と大聲にて叫びたるに答へもなく、院長の醫學博士

に手を握られたるまゝ、何の苦みもなく、晏然として眠るが如くに大往生を遂げたるは、昭和十三年一月十二日午前四時四十四分にてありし也。

本人が未だ幽かに呼吸しつゝある間に、院長に菊代の來歴の概要及び土人部落に於ける私の難事業を共にせる事や、其他歸京後の困難なる仕事を、献身的に助けたる顛末を語り聞かせたるに、院長曰く、『ア、其れでよく解りました、此種の病人が何の苦痛もなく、斯くも安らかに眠るが如くに逝くといふ事は、百人に一人もあるかなしであつて、御生前の徳に天が酬ひたまひしものと信じます』とて驚かれたり。

世は如何に文明に進みたりとはいひ、形而上の學問は未だ完全に發達せざれば、人は微妙なる靈の作用を知るに至らざるも、菊代が院長



に止められてありしに拘はらず、密かに電報にて私を東京より呼び寄せ、最後の對面して名残りの言葉を交はし、間もなく永眠せるが如きは、驚くべき事なると共に、本人は冥々裡に死期を自覺してのこと、信ぜらる。私にありても本人が死亡せる二三週間前より、生來未だ曾つて體驗せしことなき位に森々として身に淋しさを感じ、眞に吾身を二つに切らるゝが如き思ひにて、やるせなきまゝ此の事を屢々菊代にも書き送りたることありしが、今にして想へば其の頃より既に妻が亡き數に入るといふ前徴の豫感にてありしやも知れず、且又菊代の死亡せるは一月十二日なるに、本人の母と姉の死亡も月こそ變はれ同じく十二日なるには、其間何等かの微妙なる靈的緣因のあること、思はる。形而上學の一助にもと、後學の爲めに之を誌して參考に資する也。

人生の悲哀痛恨の最なるものは、死別より甚しきはなし。離恨綿々として永なえに消へざるも、逝きにし人の再び歸るべきにあらざれば、死亡通知の電報を房州より大阪の長女夫婦と東京の子息等に發したるに、孰れも大急ぎにて東條に來り、世にありしときのまゝなる菊代の遺容に接して最後の別れを告げ、遠路のことなれば同地に於て茶毘に附し、遺骨を東京の自宅に持歸り、私の友人なる東京神田福音基督教會の牧師國谷秀氏司式の下に、基督教式にて告別式を行ひたる後、即日自動車を連れて、埼玉縣栗橋驛の近在なる新郷村字中田の光了寺に到り、私の教友なる同寺の住職土岐龍英師は、故人に『清淨院釋妙徳菊香大姉』の法號を授け、壇家總代や栗橋有志の人々も會葬し、莊嚴町重なる佛教式の葬儀を營み、豫て私自身の爲めに築き置きたる此寺





静御前の菩提寺なる光了寺の私の墓

の墳塋に埋葬せるなりき。

現住職土岐師の父祖連綿として二十五代に及びたる光了寺は、昔し義經の叔父なる土岐出羽守光行が、發心して親鸞上人の直弟子となり、光了寺の住職となりてありしものにて、當時義經の跡を慕ひて東國に來りし静御前は、其の縁故に依り暫く此寺に滞留し、更に奥州に發足せしに、途にして義經が陸奥の高館城にて戰死せる由を傳聞し再び光了寺に歸り來りて尼となり、文

治五年九月十五日の曉つきに、静は自刃して果てたりといふ古き由緒ある寺なると、死と偽りて蝦夷に落延びたる義經を眞に戰死せるものと思ひ詰め、之に殉したる可憫の静女に同情の餘り、義經公と静御前の傳記の著者なる私は、自分の墓地を此處に定めたるなり。

一人の菊代を葬るに、佛耶二宗の葬儀を以てせるは、私は神佛耶共信の者にて、一宗一教に拘泥せざるが故なり。熟ら惟みるに、凡そ宗教なるものは、人に神靈の存在を示し、神を基ひとして教を説く機關なれば、諸教一如、更に甲乙なく、落つれば同じ谷川の水なるに、各宗互に障壁を設けて甲論乙駁、我田引水の我を張る妄執は見苦しき事なり。之を例へば各宗の教主は、富士山の案内者たる先達即ち強力の如きものにて、要は登り道を知らぬ者を山頂へ案内するまでの事にて、



之を知る者には先達の必用なしと同じなるべし。富士に不二、不死、不盡等幾多の異なる名稱あるも山は一なるが如く、宇宙に偉大なる力あり、神道にては之を神といひ、儒教にては天、佛教にては阿彌陀、基督教にてはゴッド、猶太教にてはエホバ、回々教にてはアラールなどいふも、歸するところ皆な此の唯一無二の偉大なる力を稱するものに過ぎず。而して各國各々其の國語を異にするが如く、之を異なる名稱を以て呼ぶが故に、其の主體も全く異なるものと思ひ、己れのものゝみを正とし、他を邪神異教と稱して誹るが如きは妄想の甚しきもの也。

假りに若し佛教者の目に、我國の神道の教へが印度の教への如くならず不備不完全のものと見るならば、何故に齊しく日本人たる僧侶等

が祖國の爲めに忠實に之を導き教へ、獨立せる自國日本の大宗教に引立つる事をせざるや。況や歴代の聖天子は之が大祭主にておはさるゝに於てをや。然るに彼等は之を努めず、亡國印度の釋迦に屈伏して、祖國の皇教を無視するは、印度が英國に屈伏するよりも醜きことなりと思爲す。世の進歩するに連れて、宗教家の思想も進歩するものと思ふれば、他宗を排して自己の宗旨に引き入れんとするが如き侵略行爲を廢め、互に一致協力して善行仁慈の天業を勵むべきものなりと思ふ。私の宗教觀は各宗平等一視同仁なり。是れ一人の妻を葬るに佛耶兩教の教友に司式を依頼せる所以也。



## 七 警 世

人間の眞價は棺を蓋ふて而して後に知らる。小谷部菊代は天資清秀明敏にして思慮周密、沈着靜肅にして慈愛の情に富み、敬神の念に厚く、身を持する質素高廉、外温順にして中に凜乎犯すべからざる威を保つ、徳義節操の堅確なる、人をして一見愛慕崇敬の念を生ぜしむるの慨ありき。己れは粗衣麩食に甘んじ、良人子女等をして粧装美味に飽かしめんと努めたる純日本婦人にてありしと共に、純東洋婦人にてありし也。舊約全書の箴言第三十一章に、當時の思想風俗を録して曰く、『誰か賢女を見出すことを得ん、その價ひは眞珠よりも貴とし、そ

の夫の心はかれを恃み、その産業は乏しくならじ、かれがながらふる間はその夫に善き事をなし悪しき事をなさす。★★★かれはその家の事を鑒がみ怠情の糧を食はず。その子女等は起つてかれを祝す、その夫もかれを讃めていふ賢く事をなす女は多けれども汝はすべての女に愈されり。艶麗はいつはりなり、美色は呼吸の如くむなし、惟だ神を畏るる女は譽められん。』と。此の箴言の書は、紀元前七百二十六年に、猶太の明君ヒゼキヤに依りて編纂せられたるものにて、今を距る二千六百六十四年前のことなるも、その眞理は依然として今日も更に渝はることなく、菊代は實に此聖書に誌されたる賢女の如くにてありし也。若しも菊代が現代の所謂モダン婦人の如きものにてありしせば、私の如き氣隨氣儘な者とは三日も同棲し得ず、自ら離婚を求めて去りし



や知るべきのみ。私は永く歐米に在留せる者なるも、而も歐米心醉者にあらず、彼の長所は之を採り、短所は之を學ぶを欲せず。然るに我國のモダン婦人等の多くは、盲目にして長所短所の辨へなく、たゞ歐風を眞似るを以て現代風と心得て怪まず、知らぬがモダンばかりにて平然たるも、私の目に醜く映じ氣の毒に思ふものは、之を内にしては古來日本婦人の美點と稱せられたる謙讓、溫順、貞淑などの徳風の衰頽に傾きつゝあることゝ、之を外にしては、美術的にして一筋も亂さぬ日本式の結髪之美風と、伏目勝なる奥床しき溫容の失はれつゝあることなどにて、彼等自身の爲めにも惜むべき事なり。猶太經典のモーセの律法に、婦人は頭髮を亂してはならぬとあり、我國の上古に猶太風俗の多く入りし時代あれば、維新前まで我國の婦人が、毎朝未明に

起きて先づ髪を結ふ風習ありしも、恐らく之に因るものなるべし。

日本婦人の伏目勝の風習も、幾百千年の體驗より我國の祖先等が案出して行ひ、之が遂に風俗となりて繼承せるものなるべし、其は男女間の危険は、互に目と目を見合はずより甚しきものなければなり。窈窕たる佳人嬌笑一番電光の如き媚眸を送れば、如何なる豪傑の士と雖も倏忽として全身痲痺す、然るを况や常人に於てをや。是れに就て想ひ起さるゝは、往年若かりし頃の私が布哇在留中の或日に、日本人の職工が工場にて負傷せしため、私は彼をカソリック教會の附屬病院へ連れ行きしに、尼僧見習の若き看護婦數名居りしが、其の中の一人にて佛蘭西人らしい容秀姿麗花の如き美人が、遇然にも私と目と目を見合はずが否や、彼女は其の豐頬に紅潮を漲らし、急に伏目勝となりて、



物を言ふにも私の顔を見なかつたのである。當時獨身で家を持つて居りし私も憎くは思はず、患者が病院に滞在の凡そ半ヶ月間ほど、殆ど毎日行きて其の婦人と話せしが、其の都度彼女は伏目勝にて、たゞ一回も私の顔を仰ぎ見なかつたのである。想ふに彼女は護身法として此の如く教育せられたるものなる可し。また私が米國在留中に、上中階級の婦人間にも多くの知己ありしが、老婦人を除くの外は、昔の日本婦人の如く伏目勝にてありしを記憶す、之は萬一の危険より自己を守るの用意と知られたり。之に反し元來東洋民族にてありし露國人は、ペートル大帝の頃より歐羅巴文明を採り入れ、我國の紅葉館時代の如く、長所短所の辨えもなく歐風を模倣し、歐洲の下級女優や醜業婦等が秋波を送りて遊蕩客を釣る風習を、身分ある婦人等までが眞似たる

より、今も露西亞にては宴會などのときに、貴夫人ともあらふものが見合亭主の前をも憚らず、他の男と互に目と目とを睨らむが如くに見合せ、雙方同時に乾杯し、念入りにも其の杯を逆まに下に向けて飲み乾したるを證するを以て禮となすことなり。此の如くして間違のなきものかと私は露西亞の友人に質したるに、若し間違つた事があれば、其の男は紳士仲間より除外されると云ひしが、凡そ愛戀なるものは、其の極に達すれば一切夢中となり、宇宙間一物の目に遮ぎるものなきに至り、何等の法律何等の制裁も無効にて、禁壓制止し難きものなれば、果してその制裁が有効のものなりや否やを、私は疑問とせるなりき。果して然るや否やは、露國の至る處に大掛りの湯屋ありて、一人乃至二人の客が浴室に入れば内部より戸の錠をかけ、外に錠がなければ他



人は絶對に入ること能はざる仕組みなり。此處に入る男女二人が如何なる事に出づるかは想像に餘りあるべし。又其等の中には特種の湯屋もありて、帳場のわきの別室に、若きロシヤ別嬪が數名居り、日本の湯屋の三助と同じ役の名目にて、三々伍々テーブルを圍み、カルタ遊びなどをして居るを、浴客が外より瞥見して選擇し、あれに流してもらふと番頭に話し五ルールほど握らせれば、その指定された女が出て來て、客と共に浴室に入るといふ仕組みなり。驚くべきはロシヤの内部にて、之も歐洲文明の長所短所の辨へなく取入れたる餘弊なるべく、我國の三省すべきところなる可し。露國の料理店の多くは各室が内部より嚴重に門かんばんにて締まる設備あり、之は合鍵にて外より戸を開けられぬ用意と知られたり。室内には長椅子を置き、而して此の室に入

りて飲食する男女の嬌態は敢て説明するまでもなかるべく、其の結果は恐るべき花柳病の流行となりて現はれ、而して舊露帝國の滅亡は、其の半面に於て、社會道德の紊れたるに原因せりと云ふも過言にあらず。往時ロシヤが模範として取入れたる歐洲文明の本場である歐本國には、ロシヤ以上の顰笑すべきものがある。彼國には晝夜の別なく街頭に男のひつぱりが横行して居るが如き其の一例なり。試に歐米の繁華な街を通れば、セルクハットを少し横冠りにしフロックコートを着てシガーを薫らし、鼻眼鏡をかけた紳士らしい男が、人待顔に立つて居るを見るべし。姥櫻のまだいろ褪せやらぬ彼地のモダンマダムが、人目を忍んで妖嬈なる秋波をその男に送れば、待つてゐましたと云はぬばかりにマダムに寄り添へ、無言のまゝ流しの自動車をひろつて同



乘し、落着く先は彼等を相手とするホテルなるべきは言ふたけ野暮と謂つべし。米國にては此種の男の中に黒ん坊も相當多く居るは、マダムの目に同種の白人が厭きてのことなるべし。私の在米中に聞いた事であるが、紐育の某金満家の夫人が、産院で出産せるに、其の生兒は赤ん坊ならぬ黒ん坊でありしとて、新聞の三面記事にも載り世人の話題にもものぼりしが、醫師は同夫人の遠い祖先に、黒人の血が混じ居り、之が數代を隔てたる後の夫人の生兒に遇然にも現はれたるものと説明せるは、マダムの袖の下が物を言はせたるものなるべし。また私の在米中の或日紐育にて、パチラース・ソサイテー即ち獨身男子の協會といふ會に出席せることありしが、私はその會の會長に問ひを發して曰く、産めよ殖えよとて神は男女を造りたまへるに、諸君は何故ありて

生涯獨身で送るといふ誓約を立て、此會の會員となるものなるや云々と。彼氏曰く、亭主が高い生活費を負擔して妻を養ひ、誰れの種か判らぬ子を生子、その子供までも養はなければならぬのが馬鹿らしいといふのは、此會の主もなる理由の一つです云々と。未だ初期にある我國のモダンマダム跋扈の趨勢が、若しも不幸にして底止する所なくんば、將來彼國と同一の徹を履むに至るなきやを私は憂ふる餘り、意中に秘めたる天機の一端を洩して警世の一助とする也。

私は日本婦人の洋装を決して悪しといふ者にあらざるも、元來洋服は祖先以來幼少の時より牛乳や牛酪にて育てられ、獸肉を主食とし、脂肪分の多き常食を攝る西洋人に適する衣服なるも、米穀を主食とする淡泊な日本食を攝る日本人、特に女性が厚く眞綿を入れたる温き下



着を十分に下に着るにあらざれば、之が爲め知らぬ間に冷え込み、自身も氣付かぬ内臓の諸症に犯され、また腰の廻りが冷えて痔疾や不妊症を來すか或は脆弱なる子供が生れ、直接國家の損失を招ぐことなれば、モダンマダム達は緊禪一番注意せねばならぬことと思ふ。之は男子も同じく洋服より受くる害毒にて、流石の陸軍當局も之に氣付かず壯丁の體格の低落せるに驚くは何たる短見ぞや。試に青年團の青年等を見よ、貧乏國にて力及ばずと云ひばそれまでなるも、寒中薄しき木綿の柿色洋服を着せ、外見は西洋風なれば、それでよしとして平然たるは、何たる愛國者なるぞや。

女性の洋装に伴ふ靴もまた然りにて、元來負けず嫌ひの西洋婦人等が己れよりも身の丈け高き男子に對し、少しにても身長を高く見せん

とて案出せるは踵の高き所謂ハイヘール靴なるも、今は歐米各國の婦人等が其の弊害の多きに惱みつゝあるなり。其は之がために足の指は水虫に罹りたるよきの如くなりて臭氣を發し、これが全身の保健上にもかゝはるとて、現に米國に於ては社會問題となつて居ることを知らずに、我國のモダン婦人等が、知らぬが佛の亭主にねだり、ハイヘール靴に浮身を窶して得々たるは、之を身知らず柿の盲目と謂はずして何ぞや。

次に我國のモダン等の多くが、毒々しく赤き口紅を唇一面に塗ることにて、此の如きことは歐米の正しき婦人間に見られぬ風習にて、彼の國の藝娼婦間に行はるゝことなり。宜べなり歐米の日本觀光客等が、白晝東京の銀座を通りて、その「夜るの女」の多きに驚くことや。歐



米の内外の真相を極めずして、子供の如く西洋の眞似をして現代風と稱する日本の男女は、須らく猛省するところありて可なり。

吾妻菊代は、西洋人が創立し且つ經營しつゝある宮城女學校の出身なるに拘はらず、泥中に咲く蓮の花の、泥になづまぬ如くに、歐風に感化されず、終始一貫、志とやかなる純日本婦人にて押通せるその意志の強固なりしこと想像に餘りありき。是れ本書の題名を、純日本婦人の佛と命名せる所以也。

凡そ夫婦なるものは、電氣の陰陽合して始めて用を爲すが如く、二個のもの一體とりて完全なる一人となれるものなれば、己れの眼を以て己れの眼を見ること能はざるが如く、所謂燈臺下暗しにて、自分の妻に如何に善行美事あればとて、夫は無關心にて之に氣付かず、また



晩年の菊代と私  
掛軸は杉浦天宮の書

妻が如何に夫の爲めに誠意を盡して献身奉仕すればとて、其れに對して夫が一々禮などをいふものにあらざるは、世間一般のことなるべし。私も平素菊代を左程傑出せる女なりとも思はずに、四十年間一身同體、何の隔てもなく過ごし來り、自分の顔を鏡なくしては見ることも能はざるが如く、私には菊代といふものゝ品性を正確に見ること能はざれば、茲に第三者より



觀たる吾妻の評を録して、せめてもの手向け艸とするになむ。

今は司直の官を退きて、日向の宮崎に雲鶴を侶とする、私の父の親友にてまた私とも友人なる名判事西野文市氏が、曾つて私の家を訪問せられたる節、述懐して曰く、『小谷部夫人は實に貞淑にして聰明稀に觀る賢婦人なり』云々と感嘆せられき。また辱知二條基弘公が、曾つて北海道に於ける私の茅屋を訪はせたまひたる節、食卓を圍みての御咄に、『君の仕事を助けて居らるゝ君の夫人は心の立派な人で、婦人の典型とも申べきで、君は仕合せ者である』云々と。辱知近衛篤磨公も曾つて左様に申され、公が拙廬へ御宿泊の節、金一封を私の妻にとて惠まれたることありき。最近亡妻の告別式の前日に、菊代の親友にて有名なる新宿中村屋の主婦でありまた『黙移』と題する本の著者と

しても、世に知られて居る相馬黒光女史が拙宅を訪はれ、本人の遺骨を安置せる室に通じ、私に述懐して曰く、『この菊代さんの様な心の立派な人は、世にふたりとありません。實に惜しいことを致しました。

私は今日お宅へ泣きに参りました。私は以前子供を二人も亡くして居りますが、曾つて涙などを人様に見せませんでした、併しこの菊代さんには心から泣かずに居られません。どうぞ私を泣いて泣いて泣き崩れさせて下さい、あなたはあちらへ行つて下さい。私を此處で一人で泣きくづれさせて下さい』とて嗚咽の涙にむせぶなりき。既往を追懐すれば悲愁傷心の種ならざるはなし。嗚呼死しての後まで人に慕はれ、其の徳を稱せらるゝ吾が妻は幸福なる哉。

靜かに人間の生涯を顧みれば、誰か一度の全盛期なかるべき。然る



に吾妻菊代は、不運にして私の如き雲を掴むに等しき理想の志に突進して身を忘れ、東馳西奔、名利の何たるを解せざる者に嫁ぎし爲め、遂に人生の全盛期にも恵まれずして一生を終り、幽明境を異にせるは、私が畢生の遺憾とするところ、悠々たる吾が恨み將た何づれの日にか盡きん。嗚呼哀ひ哉。

玉ならば手にも纏かむをうつせみの

世の人なれば手にも纏かれず

(萬葉)

### 純日本婦人の佛 畢

昭和十三年四月十七日印刷  
昭和十三年四月二十日發行

不許復製

著者 小谷部 全一郎  
發行所 東京市品川區大井元芝八四九

印刷者 山本 禎 男  
東京市牛込區山吹町一九八

印刷所 株式會社 宗文社印刷所  
東京市麴町區下六番町四十八

發行所 厚生閣書肆  
電話九段三二一八番  
振替東京五九六〇〇番



終

